「――以上です。こちらがご依頼の件に関する調査報告書となります。どうぞ」
「これはどうも。では早速失礼して」
似合っているとでも思っているのだろうか。統一性の欠片も無い、しかし一見しただけで金がかかっていることだけは察することの出来る一揃えで貧相な体躯を包み込んだ依頼人は、太い葉巻を吹かしながらソファの上に短い足を組んで座り、差し出された調査書に目を通し始めた。紙面を見詰める抜け目の無い視線は、法の隙を突いた商法で僅か一代にして財を成した者特有の浅ましさが潜んでいる。何処ぞの社会面の風刺画をそのまま写し取ったような風体を初めて目にした時には、込み上げてくる失笑を堪えるのにひどく苦労したものだが、幾度か面を会わした今となっては寧ろ感心する気持ちの方が強くなっていた。
しかし如何なる人物であれ、依頼人は依頼人だ。彼の依頼内容は一応我が探偵社の方針に沿うものであったし、金払いも良さそうだったのでこうして受けてみた次第だが。
火が点いたままの葉巻の先から燻る煙――香りから察するにセニョリタスか、こんなところだけは国産品を好むらしい――の行方を目で追いながらぼんやりと思い返す。
通常、こういった人物から受ける依頼には、怪異現象と信じていたものが実は本人ですら意識していないだろう、自身の行為の後ろめたさから来るものであることの方が多い。
そういう時は、結果的に少年と黒猫には無駄足を踏ませることになるわけだが、しかし自分としてはそちらの方が遥かに助かる、というのが正直なところだ。

久々に手ずから淹れた珈琲を傾け、癖のある葉巻の匂いを一時鼻腔から追い払う。
無論彼らとてそういった怪異や災難による事件を歓迎するつもりなど毛頭無く、全く人騒がせなとぼやきつつも安堵していることは承知の上だし、また自分としても同意するところではあるのだが、しかし『大人の事情』というもの存在するところが、自分と彼らとの相違点でもあった。
若し其れがよくある思い込みであるなら、左程労せずして依頼は解決。後は尤もらしい理由をまくし立てて一気に丸め込んでしまいさえすれば、自然大金が舞い込んでくるわけなのだから、これほど楽なことは無いのだ。道義的見地からすれば些か差し障りがあるのだろうが、そんなことは構っちゃいられない。こちとら、霞を食って生きているわけではないのだ。
よって、今回もそうであることを望んでいた訳なのだが。
かちゃり、と微かな音を立ててカップをソーサーに戻し、デスクの上で緩やかに両肘を突いて手を組み、甲の上に顎を乗せた。
しかし、残念ながら今回の依頼はホンモノだった。
渡した報告書を重箱の隅でも突くかのように熟読している依頼人の姿を、醒めた目線で見据えた。尤も、俺から言わせてもらえば、あんたが自ら進んでひっかぶった災難だろ、っていう一言に尽きるんだけどね。……分かって無いんだろうなぁ。
そんな自らの姿が他者の眼から見てどう写るのか、考えたことも無いのだろう依頼人の姿を眺め、小さく溜息を吐いた。
そもそも、其れが分かるような相手なら、うちのような怪しげな探偵社を頼りにしなければならな

いような羽目に陥ることなど起こり得ないだろう。
幾ら手持ち無沙汰であったとはいえ、分かりきったことを一瞬でも思考した自分に苦笑した。
今回依頼された事件は、結論から言えば、世間様で祟りと称されるものであった。
其れが判明した時には宗教が絡んでくるとなると厄介だな、と密かに案じていたのだが、詳しく調べていくうちに其れが年代を経た品に宿る物の怪によるものだと分かり、胸を撫で下ろしたものだ。
幾度か調査に赴いた少年の報告によればこうだ。
代々続く旧家に於いて半ば世襲するべき一品の一つとして、『其れ』が在った。
彼らが『其れ』と実際に契約を果たしたかどうかまでは定かでない。しかし、『其れ』を大事に祭り上げれば家は栄え、粗略に扱うと祟りが起こる、ということだけは口伝で受け継がれていたらしい。
しかし頑丈な門のかけられた扉を開いた先で少年が目にしたのは、埃の被った三方と枯れ果てた榊。そして、白く埃が積もり、鼠に齧られた痕跡まである注連縄であった。
時代の流れとはいえ古きものに対する畏敬の念を失った行いに、少年も黒猫もひどく遣る瀬無い気分になったらしく、自分を前に其の下りを報告をする際に、大きな溜息を漏らしたほどだった。
十数年前までは何ら問題なく日々を過ごしていたと言うからには、恐らく家を継いだ現当主が良くも悪くも今風で、そういったものを忌み嫌い。受け継がれた習慣を無かったものとして扱うことに取り決めてしまったのだろう。
しかし当然のことながら其の行為は、契約に反する不当な扱いを受けた『其れ』の怒りを招くこととなった。

ある日を境に、彼らの取引が巧くいかなくなってきた。
それだけなら大した損害は受けなかったのだろうが、世知辛いことこの上ない今のご時勢だ。平穏な時代であれば身代を持ち崩すには至らなかった程度の不運だった筈が、其の取引の失敗を切欠に次から次へと事業が立ち行かなくなってしまい、不信心な現当主は心を入れ替える暇どころか原因を特定する猶予すら与えられず、先祖代々頑なに守ってきた家屋敷を、そっくりそのまま債権者である目の前の男に譲り渡すまでに落ちぶれてしまった。
一方、どれ程時間を経ても一向に改善されない扱いに怒り狂っていた『其れ』は、人間たちが忙しなく行き交っている間にすっかり祟り神へと変貌を遂げており。そして其れを知らぬまま、手に入れた祟り神憑きの屋敷に依頼人が移り住んだことから事件は発生したという次第だ。
彼等は何処まで其の現状を把握していたのか。また、家屋敷を明け渡す際にそういった言い伝えの存在をこの依頼人に伝えたのかどうか。
依頼を請けた時点で、彼等は既に地方の縁者を頼り帝都から立ち去ってしまっていたので、ことの真偽を確かめるにはこの依頼人へ向けて少年の仲魔の読心術を使うしかなかったのだが。
目を伏せ、目の前の光景を遮断した。ほんの少しだけ、口元が歪む。
色々考えて、結局止めさせた。
以前より随分とましになったものの、未だ世間に慣れないところのある少年が、充分な経験を積まないうちに陰湿極まりない人の悪意を目の当たりにするのを厭う個人的な感傷もあった。しかし何より、彼等以上に不信心であろうこの依頼人なら、其の言い伝えを聞く聞かんに関わらず、恐らく同じ

結果を招いたに違いないだろうから。
寝不足の、やつれきった面持ちで運転手に手を引かれながら此処へやってきた時の依頼人は、そんな目に遭わされておきながら、尚も己が身を襲う怪奇現象を何かの間違いだと思い込み、そしてそういったことを生業としている自分たちを前にして其の心情を隠そうともしていなかった。
其の時は彼処まで頑なのはいっそ天晴れなことだと、大いに呆れたものだが、今回の件でそれなりに懲りたことだろう。
僅か数十年の間で科学分野が躍進的に発達したことで電灯や瓦斯灯が街中を照らし、夜の闇はすっかり其処に住む人々から遠のいて久しいが。
――いい勉強になったと思えよ、あんた。
とはいえ、決して人の関わってはならない領域というものは確実に存在する。たとえ、如何なる者であっても其れらに対する敬意や畏怖を無くしてしまってはならないのだ。
少年が『其れ』を討ち果たしてから、急速に血色の良くなった依頼人の顔色を眺めた。
此処でこうしてにこやかな笑みを浮かべ続けている自分が、心の片隅でそんなことを考えているだなんてこれっぽっちも感知できていないのだろう当の本人は、漸く一連の調査報告書を読み終えたらしく、ふう、と一息ついて肩を回した。
「……成る程。いや全くとんでもない目に遭ったものだ」
けしからんものを押し付けおって。一体いくら貰したと思っているんだ。これでは割に合わんにも程がある。追い込みをかけてやろうか等々と忌々しそうに口元を歪めながら元の持ち主を罵り続ける

依頼人を、手を振りながらまぁまぁと宥めた。
「まさか、そんなものが本当に居るだなんて思ってもみなかったのでしょう。仕方ありませんよ」
自分の言葉に頷きながら、依頼人はそれでも不服そうに鼻を鳴らした。
書類を手にしている間中、殆ど吸われる事の無かった葉巻は大方灰になっていた。また其処から立ち昇った芳香は、依頼人が身につけている半端でない量の香水の香りと交じり合い、一種異様な臭いへと変化して室内に充満している。
嗜好品の使い方を知らない成金野郎はこれだから、と辟易しながら耐え続けていたが、流石にもう我慢の限界だった。早々に引き取ってもらわねばと思い、口を開いた。
「……それでは失礼ですが、内容にご不満が無ければ、お支払いの方をお願いしたいのですが」
一刻も早く窓を開けたいという衝動を押さえ込んで話を詰めると、男は態とらしく嗚呼これはこれは申し訳ない、と答えながら、勿体ぶった素振りで懐から封筒を取り出した。一見しただけでも重量感を感じる厚さに内心口笛を吹きながら、表立っては平素通りの表情のまま椅子から立ち上がり、近寄って来る相手を待ち構える。
今日は久し振りに三人で外食でもするかと心躍らせながらゆっくり差し出された報酬に手をかけた瞬間、手首を掴まれた。
汗でじっとりと濡れ、生ぬるい感触を与えてくる男の手の平の熱に嫌悪が走った。咄嗟に其の手を振り払いかけた衝動をぐっと堪え、訝しげな表情を浮かべて眼前の依頼人を見詰める。
……おかしいな。こいつからは『そういった』気配は感じ取れなかったんだが。

困惑した表情の下、冷静に思案を巡らせる。
俺としたことが見誤ってしまったのだろうか。だが、そういった連中が好むだろう外見条件の全てを兼ね備えているライドウに、おかしな目線を向けることも無かったのに。……となると、もしやあれか、年増好みとか。いやいや、この俺に悟らせないほどの腹芸がこいつに出来るとは到底思えねェ。
ああだこうだと考えてみたものの、現状では結論らしきものは見出せそうに無かった。
しかし何れにせよ、共に居ると主張した少年を宥め、何時も通り外回りに行かせた判断は正しかったようだ。この程度の男であれば、たとえ無理に手篭めにされかけようとも、自分ひとりで如何様にも対処できる。
依頼人の身体捌きや言動の数々から冷静に見定め、結論を出したところで、ふと思い至った可能性に笑いがこみ上げた。
いや、……ライドウが居たら別の意味で危なかったかもしれない。
若しあの少年が今の状況を目にしたなら、途端にあの切れ長の目を据わらせて自分と依頼人を引き離そうとするだろう。下手をすると刃傷沙汰になるかもしれない。
全く洒落にならねェなと可笑しく思いながら内心で胸を撫で下ろしていた自分に、依頼人は其のにやけた顔を寄せながら囁きかけた。葉巻の濃い匂いが鼻をつく。
「所長さん。……お宅で働いている助手のあの子。綺麗な顔をして随分とまぁ、凄いのが背後に居るそうじゃないですか」
すぅ、と心が冷えた。

しかしにこやかな笑みを浮かべたまま、静かに見返し口を開く。
「……何のことでしょうか」
「ふふふ。……まぁ、そう返されるだろうとは私も思っていたのですが」
当然のことながら、依頼人は自分のそんな態度に怯む事無く、卑しい笑みを浮かべながらねっとりとした目つきでこちらを覗き込んできた。
当人としては威嚇のつもりなのだろうが、生憎そんな爬虫類のような容貌に怯えるほど自分はかわいらしい人間ではないし、平穏な人生など送ってきてやしないのだ。寧ろ。
じりじりと寄せられる醜い顔からさり気無く距離をとった。
寧ろ、其の程度で世間を渡って来れた自らの幸運を、お前は天に向かって感謝すべきだろう。お粗末にも程がある。
人畜無害な『鳴海探偵所長』の貌の裏側で、目の前の男を嘲笑するもうひとりの自分を感じた。
笑顔を浮かべて惚け続ける自分の態度に早々焦れたのか。粘着質な目つきはそのままに、張り付いた笑みを引っ込めた男は自らの舌で唇を舐め、口を開いた。
「……なんでもお宅自身、怪しげな組織と色々つるんでいるらしいとも聞いておりますよ」
其の言葉に反応し、卑しい男の仕草をせせら笑っていた方の自分もまた、『鳴海』と同じように目の前の男を見詰め始めた。
久方振りに感じる其の懐かしい感覚に抵抗を覚える事も無く、身を任せた。
「ほう。――例えば、」

「例えば。例えば、……そうですな。何と申し上げましょうか……」
動揺の欠片も見せない自分を、今度はあからさまに憎憎しげな表情を浮かべながら依頼人は見据えてきた。絵に描いたような態度の豹変振りには最早、失笑する気にもなれない。
さしずめ代々続くどこぞの名家か、若しくは件の一族の誰かから聞き出したか伝えられでもしたのだろう。其の情報を手にした折にはこれで自分も名家の仲間入り、と有頂天になったのだろうが、所詮は成り上がり者。田舎から出てきて巧い具合に時流に乗れたはいいものの、手を出してよいものと口にすることすら忌避すべきものの違いを見抜く自すら持てていない輩であるようだった。
其れを教えた何某も、恐らく其れを見抜いた上で、態と思わせぶりに口を滑らしたのかもしれない。決して褒められた行為ではないが、間接的に報復を果たす手段としては、なかなかに有効であったといえるだろう。この依頼に関する件といい、実に陰湿ではあるけれども。
情報元を一切尋ねる事無く平然とした面持ちで見返してくる自分の姿に、依頼人は少々調子が狂ったのだろうが、しかしそれでも尚、弱みを握っている己が立場の優位性を信じて口を開いた。
「……巷で『やくざもの』と称されている手合いには、何もお宅だけでなく私どもも色々と世話になっておりますので、無論彼らのこと指すわけではありません」
「まぁそうでしょうな。こんな世知辛い世の中では、お互い様です」
彼らでは対処しきれないことであったからこそ、貴方は当社を頼って来られた。
やんわりと手を振り解き、さり気無く一歩退いて距離を空けながら指摘すれば、依頼人は其れに気付く事無く確かに、と頷いた。

「ええ、ええ、其の通りです。しかし、――私が言っておりますことはですね、」
慣れない敬語を無理して使い、言い回しがおかしくなっていることにも気付けていないお目出度い依頼人の科白に、笑顔のまま聞き入り。より具体的な比喩を口にするしか無い方向へ会話を持っていき、手薬煉を引いて男の回答を待ち構えた。
其れさえ口にしてくれさえすれば、後はもう楽なものだ。
今の此の状況には、ちょっとした高揚感すら感じ取れた。
「……『伊勢へ行きたい、伊勢路が見たい、せめて一生に一度でも』。其の御威光に縋りたくなるのも分かる、ということですよ」
そんな自分の思惑など想像もしていないのだろう。依頼人は勿体ぶった口調のまま、謳うような調子で有名な音頭の一説を口にした。
通常であれば、充分に戯言の範疇に入る類の其の科白。しかし今、此の状況下で自分を前にして口にするなら、其れは別の存在を匂わせる一節となる。
漸く白状してくれたかという気分と、それなりに気の利いた言い回しの心得も持っているのだな、といった場違いな感心が胸中を過ぎった。
切り札を見せたつもりでどうだとばかりに得意げになっている依頼人には、其れが自らの死刑宣告となったことなど全く思ってはいないのだろう。その愚かさに憐憫の笑みを浮かべる内面の自分とは異なり、今『鳴海』として在る自分は、強張った笑みを浮かべた。
……莫迦だねお前さん。

内心では見下し、しかし表では動揺した素振りを見せている貝分を見て、漸く己が望む反応を引き出せたと勘違いした依頼人は、したりとばかりに出っ張った前歯を見せて笑った。
戸惑った風に目線を揺らしながら俯き、辿々しく言葉を発する。
「……其れは、」
「いやいや、深くは尋ねてくださるな。ただ、私が其れを知っているのだと言うことを、是非とも貴方には心に留めておいて頂きたかった。――それだけのことです」
そうそう、忘れるところだった。
途端に気弱になった自分を見て依頼人は気が大きくなったのか、喜色満面の笑みを浮かべ百円札がみっちりと詰まった革張りの財布を其の懐からいそいそと取り出し、唾液で湿らせた指でひのふのみと数えた其れを数枚、差し出してきた。
「こちらを。今回の依頼に関する謝礼とは別の、私個人の気持ちのようなものです。なぁに、お気になさらず。大した額ではございませんので」
「……」
慣れた行為とはいえ俺もよくやるよなと思いながら、差し出された札と男の顔を戸惑ったように交互に見遣ってやれば、其の反応がお気に召したのか。陰気な愉悦に浸った笑みを浮かべた依頼人は尚もずずいと身を乗り出し、机の上に置かれていた自分の手を再び掴んで札を握らせた。
「……これからも、宜しくお願いしますよ。鳴海さん」
お互いに、決して損はしませんから。

「……」
握らされた札を拒絶する事無く、無言で見詰める自分を満足そうに眺め。それではこれで、と依頼人は腰を上げた。
「忙しないことで申し訳ないのですが、今晩帝国ホテルで開かれるパーティに招かれておりまして。いやぁ燕尾服と言うものは窮屈なので苦手なんですが、こればっかりは致し方ございませんなぁ。連絡はまた後日にでもこちらから取らせて頂きますので、其の折にでも」
似合わぬ帽子を被りながら勝ち誇った表情を浮かべて振り返った其の顔と視線を合わせ、静かに口を開く。
「――お気をつけて」
「貴方も。……なぁに、悪いようにはしません。ご安心を。それでは失敬」
多少手間取ったものの、いい塩梅に事が運んだことに上機嫌になった依頼人には、自分の科白に含まれた意味合いになど気付けよう筈も無い。形ばかりの儀礼として帽子を持ち上げて、扉を開けて立ち去って行った。

廊下から其の影が消え失せて、階段を下りる音も遠くなった頃合に素早く窓を開けた。
片手に握ったファイルで扇ぎながら立ったまま電話をかける。二度のコールで出た相手と短い遣り取りをしながら手近にあった用紙に走り書きで少年への連絡を書き留めた。電話を切った後は椅子に

は戻らず、そのまま社の扉に〜dose d〜と書かれた板を掛けて洗面台に向かい、いいように握られ続けた手を石鹸で隅々まで洗い、ついでに口も濯いだ。

ひとしきりさっぱりしたところで自室に戻り、ポケットの中に忍ばせた小さな鍵を箪笥の鍵穴に差し込んだ。一段を全て引き出し、其の奥の背面の一部に設えさせた小さな隠しから、寄木細工の小箱を取り出した。

「全く。——今になってまで、お前さんの世話になるとはね」

まぁ、手放さなかった俺も俺だけど。

溜息混じりにぶつぶつと独白しながら慎重に模様をずらしていく。其の作業を十幾つか繰り返し、微かに乾いた音が鳴ったところで箱の一面を滑らせ、中から薄い長方形の黒の革張りの鞄を取り出した。

留め金を外し、群青色の天鵝絨の布の上に置かれた、短剣というには細く、短すぎる其れを手に取り。左手で柄を握り、鞘を引き抜いた。

畳針より細い鋼の刃が、姿を現すと同時に光を放った。

あちらで任務に就いていた際、親交のあった伊太利人のお仲間から頂戴したものだが、随分と重宝している。何せこの国では存在すら知られていないに等しい逸品である上、使用した際には出血はおろか外傷すら殆ど残らず、また標的が死に至るまで尚三十分ほどの猶予があるというのだから、全く素晴らしいことこの上ない。

昔の記憶そのままの姿で眼前に現れた刀身に、しかし錆や歪みが生じていないか、あらゆる角度か

ら検分した。そうして僅かな曇りさえ浮かべていない其の鋭くも美しい姿を確認し、満足げに頷いた。
無論、自由に使いこなす為には激務の合間を縫って其れ相応の訓練を積まなければならなかった訳だが、其の苦労を遥かに補って余りあるものを此れは自分に齎した。
そっと己が腕に刀身を滑らせる。痛みどころか、摩擦さえ感じない。
口元に笑みが浮かんだ。
……それにしても。
刀身に反射する光をうっとりと見詰めながら独白する。
「目ェつけたのが俺で良かったなぁ」
若し自分以外の関係者に声をかけていたなら、果たしてどうなっていたことやら。
世の中には、口にして良いこととならぬことがある。
言った本人にとってはたとえ軽い火遊びのつもりですらなくとも、相手からしてみれば、そんなことは知ったことではないのだ。
無知は、決して免罪符にはならないということを彼は知っておくべきだった。
「……調査費吝嗇るくらいなら、未だ可愛げがあったんだけどねェ」
手にした其れを一旦天鵝絨の上に戻し、洋服箪笥に並んだ衣装の中から何点か目ぼしいものを見繕う。
普段の自分の印象や少々改まった場所であることを踏まえて、黒を基調とした一揃えを選び、片方の手でタイを緩めながら其れらを手前の方に移動させた。

「――誰にも迷惑かかんねェように、一撃であの世へ送ってやるよ」
何せ俺は腕がいい。痛みすら殆ど感じることなく逝けるだろう。
しゅるり、と音を立てて首からタイを引き抜いた。
歳にそぐわぬ風体の、背丈ばかりがひょろひょろと伸びた軟弱者と彼の目には映ったのだろう。
しかし、そんな相手側の期待に沿ってやらねばならない義理など、自分にはこれっぽっちだってありはしないのだ。
素早く衣服を改め、靴を履き替え、引き出しから懐中時計を取り出す。
世の中には様々な人間が存在するのだということを、彼は残された僅かな時間の間に悟ることが出来るだろうか。
袖を捲り左腕に巻かれた腕時計を外し、柄についた紐で以って直接其れを手首に巻きつけ、幾度か関節を曲げて具合を確かめながら調整を加えていく。
「……まァ、無理だろうな」
幾度か其の動作を繰り返し、満足のいく位置に調整し終えた『其れ』を覆い隠すように襯衣の袖を引き下ろし、袖口を翡翠のカフスで緩めに留めた。
そもそも彼は、自分で自分の死刑執行書にサインをしたことにすら気付けていないような有様だ。
望みをかけるだけ無駄というものだろう。
人の死に方としては、幸福とは言い難いものになるのだろうけれど。
別の奥の隠しから化粧道具を取り出して色を作り、不自然に見えないよう、且つ見る者には昼行灯

の探偵所長を連想できないほど全くかけ離れた印象を与えるよう、顔に少々の細工を施していく。仕上げに目元に小さく黒子を描き込んだところで筆を置いた。整髪櫂を手に取り、額を出す形に整える。

「……訳分かんねェもンに殺られるよりゃアましだと思って、諦めてくれ」

そうとも。そんなモノに殺される恐怖に比べれば。

タイを締め、形を整える。

――これから自分が為そうとしている行いの、何と慈悲深いことか。

額にかかった前髪をちょいちょいと直し、其の場から一歩退いて姿見で全身の仕上がりを確かめる。

「……なぁ、そうだろう、」

そうして鏡の中から見返してきた顔に向かって、優雅に微笑みかけた。

英国製の品の良い仕立ての外套で長身を包み、ビルヂングを出た。

視線を感じた方に目を向ければ、顔馴染みの近所のおばちゃんが、ビルヂングから出てきた身なりの良い紳士の姿に目を見張っていた。

見知らぬ者に注がれる、好奇心を露にした彼女の不躾な視線に満足し、小さく会釈すれば慌てたように、にぎこちない仕草で返礼された。口元に笑みを浮かべ、外套の襟を立てて颯爽と其の場を立ち去る。

銀楼閣ビルヂング脇の小道を足早に通り抜け、硝子店の向かいまで来ると、少々離れた場所から様子を窺っていたのだろう、見慣れた者にしか判別し難いとある特徴を記した外国製の高級車がすっと

横付けした。
ためらう事無く後部扉を開け、中に乗り込んだ。
スプリングの良く利いた後部座席の隣には、先程電話をかけた相手の姿。
素早くにやりとした笑みを交し合い、前を向いた彼が懐から取り出した、金文字で飾られた一通の封筒と紙切れを受け取った。滑るように走り出した車内で中を検め、差出人と宛名、添えられた紙に記された経歴を即座に頭に叩き込んでいく。
「――車代も含めて、貸しひとつ」
「仕方ないな、分かったよ。……しっかし相変わらず頼りになる男だねェお前さんは」
前方を見据えたままぽつりと呟かれた言葉に、紙面から目を離さぬまま肩を竦めて応えた。何分急な頼みをきいてもらった立場だ、贅沢は言えなかった。
渋るでもなく、要求をすんなり受け入れたことで相手の身に纏う空気が多少緩んだのを感じ取った。微かに気安くなった雰囲気の中、相手が口を開く。
「ふん、これしきのことで手間取る訳あるか」
「まァ、お前さんだものな」
世辞を流した相手の言を肯定し、笑みを浮かべた。
電話をかけてから二時間とかからずにこちらの要求事項を全て揃えて駆けつけてきた相手と、暇潰しも兼ねて言葉少なに会話を交わしていく其の間にも、車は只ひたすら走り続けた。
「――帰りは、」

そろそろ目的の場所へ着こうかという頃合に、再び相手が口を開いた。其れに対し、懐に手を突っ込みながら答える。

「適当にするさ」

「分かった。……おい、こんなところで香水なんぞつけるな」

取り出した小瓶を目に留め、抗議する相手を無視して蓋を開けた。

非礼な行為であることは承知していたが、まさか探偵社内でこのような匂いを振り撒く訳にはいかなかったのだから仕方が無い。新たなる依頼人の残り香だと主張したところで、誰かが運んできた匂いと其の場で発生した匂いとでは強さが違う。ましてや、相手が相手だ。あの少年と黒猫を誤魔化しきることなど、到底不可能だろう。

朗月の如き冴え冴えとした其の黒き立ち姿と、其れに寄り添うしなやかな影を思い浮かべる。

万民が認める其の外見や実力も含めて、余人とは比較にならない存在でありながら、其の実、限られたものに対してひどくしぶとい執着心を見せることがある少年の、唯一年相応な感情を向けてくる対象が自分だけである、というこの事実――黒猫も其の対象であるやもしれないが、あれはあれで自分に向ける感情とはまた其の質を異にするので除外させて頂く――は、自分の矜持を満足させるに充分ではあるが、しかし少々厄介なシロモノでもあった。

其のお陰で、以前には思いもよらなかった苦労を背負い込む羽目になる。例えば、今回のように。だが、何より困るのはそういった手間を考慮に入れても悪い気がしない自分だろう。

全く、重症もいいところだ。年甲斐も無くそう思い、照れ臭さに笑みが浮かんだ。

「仕方ないだろう。固いこと言うなって」
それでも矢張り割を食らわしてしまった相手に気遣い、親指で小まめに壜の口に栓をしながら盞の先に着いた硝子棒を両耳の下方に軽く擦り付け、素早く仕舞い込んだ。一瞬の内に作業を終えたつもりだが、其れでも車内に漂った強い香りに軽く眉を顰められてしまった。相手は続いて口を開きかけたようだが、しかし実際には小さく溜息を吐くに止め、無言で小さく窓を開けられた。
すまんね、と呟きながら耳の下につけた香水を右手首を使って練りこみ、窓の外を流れる景色を眺めつつ左手にも擦り付けた。
通りを歩く人々の身につけている衣装の割合が着物と洋装半々であったのが、次第に洋装の割合が増えていく。そろそろかな、と思いながら寛いでいるうちに、やがて目指す建造物が目に入ってきた。
「……そら、着いたぞ」
赤い絨毯が敷かれた帝国ホテルの正面に静かに横付けされた外国産の高級車に、従業員が駆け寄ってくるのが見えた。
「おう。それじゃアな」
片手を挙げ、へらりと軽薄そうに笑った。
そうして表に向き直り、車の扉を開けた従業員に対して何処へ出ても恥ずかしくはない、立派な紳士の貌を見せながら、優雅な仕草で降り立った。そんな自分を置いて車は無言で走り去っていく。
親しみを感じさせる、だが卑屈では決してない堂々とした立ち振る舞いに加え、きちんと整えられた髪や見事に着こなした礼服姿の自分に、自然ホテル側の対応も丁重なものになっていた。

招待状を見せ、先導を受けながら満足のいく対応に気分が良くなった。
近寄ってきたクローク係へ笑みを湛えながら外套を預ける。渡された引き換え札をポケットに入れつつ、しかし加減が重要だ、と気を引き締める。
この国では只でさえ無用に目を引きがちな長身を誇る我が身だ。先ずは周囲に溶け込むことを念頭に置いて、観察に努めるべきだろう。

会堂付近に差し掛かると、楽団の演奏音と共に集った人々のざわめきが耳を打ち始めた。
天井を飾る煌びやかなシャンデリアに、華麗に着飾った人々。
床に敷かれた深紅の絨毯を踏み締めて落ち着いた所作で歩を進め、途中出くわしたボーイから受け取ったシャンパン片手に其の場でぐるりと会堂内を見渡す。
日本人だけでなく外国人の姿も多々見受けられるところをみると、主だったゲスト層は晴海を拠点とする輸入商といったところか。
お陰で悪目立ちしがちな己が長身も、左程注目されずに済みそうだった。無用の労力をかけずに済むなら、其れに越したことは無い。
再度会堂内全体を見渡し、其の場に居る人々の身につけているものだけでなく、立ち振る舞いや醸し出す雰囲気をも読み取っていく。
ブルジョワは嫌いじゃない。

豪奢な宝石を身につけた幾つかの影をざっと眺めるが直ぐ様目を逸らし、小さく鼻を鳴らした。
……但し、其れは本物であればの話だ。
欧州で数度、遠くから目にした本物の人々の立ち振る舞いは、この自分でさえ感嘆の溜息をもらしてしまいそうになるほど、それはもう見事なものだった。比較するのも些か酷かもしれないが、それにしたって先程の一瞥だけで本物と判る人間は、会堂に集っている人々の三割にも満たなかった。
しかしあの下品な依頼人が招待される程度のものであることを考えると、其れもまた当然の話かと口の端で皮肉げな笑みを浮かべた。数少ない本物かと思われる面々も、大方このパーティの格を上げるために呼ばれたのだろう。背に腹は代えられないとはよくいうが、全くご苦労なことだと思いながら、手にしたグラスを傾けた。
流石帝国ホテルというべきか、シャンパンひとつにも手を抜いていない。
下り気味の機嫌がたちまち向上するのを感じ、こんな状況でもなかったら存分に楽しむんだけどなぁと思いながら小さな気泡が立ち昇る細長いグラスを僅かに掲げ、笑みを浮かべた。そうして時折話しかけてくる人々の相手を愛想良く、且つ差し障りの無い範囲でこなしていく。
軍内に於いて厳格な教師の下について正式な礼儀を学び、更に本場の社交界で鍛え上げた身の振る舞いは用意された素性経歴以上に効果を発揮しているらしく、矢張り此処に於いても誰一人として不審げな眼差しを向けてくる者は居なかった。
そんな状況を当然のことと悠然と受け止めつつも、同時に何処かしらつまらなさを感じてしまい。こういうところも相変わらずなんだなと、既に別人として生きている筈の己の中に、現役時代から通

じているものを見出した。しかし其のことを卑屈に思うでなく、寧ろ可笑しささえ感じている自分が妙に擽ったかった。
グラス片手にゆっくりと会堂内を移動し、改めて会堂内に居る一人一人の顔を判別していく。
幸いというか、うら若き女性が自分に声をかけてくることはごく稀であった。
大抵、両親のうちどちらかが付きっ切りで目を光らせているか、或いは親の定めた婚約者と共に居るかといった具合だし、そもそも此の国ではたとえ決まった相手が居なくとも女性から男性へ話しかける行為自体がはしたない、という感覚が根深いのだ。為さねばならぬことがある今回のような折には非常に助かる慣習だが、それにしたって華やかに着飾った女性たちそっちのけで歳を食った野郎の顔にばかり目を走らせなければならないのは、一種の苦行であるように思えてならなかった。
こういったパーティは先ず階級の低い者から順に会場へ現れ、其れが高い者になればなるほど真打登場とばかりに一番盛り上がる頃合を見計らって姿を見せる、というのが定石なのだが、どう見積もっても一角の人物には見えなかったあの依頼人が未だ顔を見せていないところをみると、どうやら自分の目算は大いに外れてしまったようだった。
幾ら商人ばかりのパーティとはいえ折角の帝国ホテルなのに何だかなぁと少々不快に思いながらも、しかし先程見極めたゲスト層を考慮に入れれば納得もいった。いくら体裁を整えているとはいえ、華族や貴族が中心となって開かれるものとは質が違うのだ。
嗚呼早く来過ぎちまったなでも遅れるよりゃましか、と自分を慰めながら壁に背を預け、酔わない程度にシャンパンを傾けつつ、会堂内を往来する人々の姿を眺めた。

……あれ。

漏れ出でそうになる溜息を堪えながら泳がせていた視線に、数多く居る礼装の内一つが引っかかった。しかし、其の影はどう考えても標的とは似ても似つかない。誰だ。

こういった場合に働く自分の感にはそれなりの信用を置いている。其の感が警告を発した相手だ、警戒するに越したことは無かった。

相手に気付かれぬよう常に視界の脇に入れながら、周囲から頭一つ飛び出た、素人さんにしては妙に隙の無い其の後姿を観察する。ざっと見積もった其の身の丈は一七〇の半ばといったところで、自分ほどではないにしろ、日本人の中ではなかなかの長身の部類に入る。

其処まで分析したところで、ふと、其の男の身の丈が少年と同程度であることに思い至り、いやいやいや別にそれだけが理由で目に留まった訳じゃないぞと、誰に対してでもなく弁解した。

少々動揺した心を一呼吸することで落ち着かせ、冷静に観察を続ける。

やがて話題にひと段落が着いたのか、話をしていた相手が辞する際ちらりと見えた男の横顔に、ほんの僅かではあるが目を見張った。

――へぇ。

正体に思い至ると同時に、危うく口笛を吹きかけた。

こと『この道』に関して、他者を褒めることなど殆どない自分の目から見てもなかなかだと称せざるを得ないほど、堂に入っている其の立ち振る舞いに感心の眼差しを向けた。

このような場所で遭遇してしまったのは全くの偶然なのだろうが、それにしたって面白い。

こりゃいい退屈しのぎになるなと、心を躍らせた。
黒の礼服に身を包み、周囲の人間と和やかに歓談する其の左頬には特徴のある黒子が一つ。規則どおり丸刈りにされていた頭は、周囲の不審を招かぬよう、短く刈上げるほどの長さに伸ばされていた。
……誰だお前。
姿形に加え、何より自分を暴行した際に見せていた酷薄な其れとは打って変わった彼の朗らかな笑顔に、同じく別人に化けて見せている我が身を棚に上げた科白が脳裏を過ぎった。
餅は餅屋というが、成る程。これでは少年が霞台でうっかり騙されてしまったのも仕方ないのかもしれないな、と納得した。
あの少年は各方面の能力に於いては非常に秀逸であるが、世間というものに慣れていないという欠点がある。或いは、世俗に生きる様々な生業の者たちに対して無知である、とでもいおうか。しかし何れにせよ仲魔の力を借りなければ、この自分を含めてそういった道の玄人の振る舞いを見抜くことなど、あの少年には到底不可能だろう。――少なくとも、今の時点では。
……ま、そのうち教えてやらなきゃとは思ってるけどな。
肩を竦めて、なかなかに優秀な後継者となるであろう少年が一人前になった時の姿を想像し、密かに胸が高鳴った。
しかし一方で、其の日が来ることを恐れている自分も存在しているのだ。
全く我ながら矛盾してるよなと自嘲しつつ、思い出すのは、先の事件の最中に降りかかった海軍絡みの災難のことだ。

若しあの時、少年が彼処でへらへらと笑っている彼の正体に気付けたとしても、其の後の展開は何も変わりはしなかっただろう。少年は海軍のお偉いさんを助けるため、物騒なものを肩代わりしなければならなかっただろうし、この自分もまた、少年の人質として暴行を加えられていた筈だ。

だが、あの時はあくまでも『偶々』、そういった、相手の正体に気付く気付かないに関わらない結果に繋がっただけの話で。少年が既に軍部に目を付けられていることを考えると、これから先、帝都を守っていく上でそういった連中との腹の探り合いが勝負に関わってくるような事態が起こり得る可能性は十二分に考えられた。

個人的感情からいえば、あの少年にはあまりそういった色に染まって欲しくは無いのが正直なところなので、出来うる限り自分が代わってやりたいところではあるし其の積もりであるが、悪魔が絡んだ現場ではそうも言ってられないだろう。仲魔の助けがあるとはいっても、実際に其れに耳を傾け、判断を下さねばならないのは少年自身であり。自分は其の時、少年の直ぐ傍らに立っていられるかどうかすら定かではないのだ。

自らの才知に少なからずの自負心を抱きつつも、所詮徒人の域を超えることのできない自分という存在のあまりの無力さに、虚しい思いが募ってきた。

しかし即座に首を振り、後ろ向きな思考を振り払う。

……いけねェ、何やってンだ。それじゃア昔のままじゃねェか。

ホント俺もしょうがねェなぁ、と首の動きを緩いものに変え、なかなか脱しきることのかなわない根深い其の感情に苦笑がもれた。

しかし長身の自分が、たとえ一瞬のこととはいえそうした素早い動作をしたことで目を引いたのだろう。それまでの間、全く素通りされていた彼の視線が、直接留まりはしないものの、自分の周辺に重点的に流され始めたのを感じ取った。

――しまった。

只単に通りすがりの目立つ者に向けるにしては、其の視線は執拗過ぎた。

前回のことといい、迂闊ではあったが、しかし明確な反応を見せ始めた相手に心は躍った。

背は向けず、敢えて視線を送る。気を緩ませたら鼻歌を歌ってしまいそうになるほど、高揚した心持で自ら一歩を踏み出した。

若し彼が自分の正体を見抜けたなら、後々に何らかの接触を試みてくるだろうことは必須。そうなったらそうなったで困るのは自分であることなど重々承知してはいたのだが、それでも矢張り生まれ持った性分というものは如何様にも変え難いもので。こうして心を入れ替えた今、決して正体を暴かれてはならない此の状況にあってさえ、彼と出くわしてしまった事を運が悪いと嘆くより、寧ろ其れを面白がっている自分が其処には居た。

先の事件では、自分に対する暴行といい、少年に対してふっかけてきた無理難題といい、正に疫病神としか言い様の無い仕打ちを加えてきた彼ではあったが、少年から為された報告の全てと、地下造船所に向かう前に相対した折の自分に対する態度を総括して冷静に考えてみればなんてことはない。実際に取った行動はどうであれ、同職に在った自分に対して尋常ではない程の執着心を隠し持っていることだけは窺い知れた。たかがそれだけ、と言われればどうしようもないことだが、少なくとも自

分にとってはそれさえ判っていれば充分だった。
当初の目的こそが最優先事項ではあるが、其れに差し障りの無い範囲でなら少々のお遊びも許されるだろう。
奴さんが何を言ってくるかなんて大抵予想がつくし。なぁに、どうとでもあしらってやるさ。
愉悦が口元を綻ばせた。
其の笑みを偶然目にしてしまったらしき妙齢の女性がほんの僅かに頬を染め、俯き加減に目線を伏せながら連れの男性と共にすれ違って行く。
其処で漸く男の面に動揺が走った。
それはそうだろう。つい先程まで観察していた相手が、自分目掛けて真っ直ぐに歩み寄ってくるのだから。
しかし宜なるかな、自分が誰であるのかについては、未だ気付いてはいないようだった。
途中受け取った新しいグラスを片手に歩を進める。
何せ此の自分の変装術は、長年経験を積んだ同職の人間ですら感嘆を以って評したほどのもの。遠くからの一瞥だけで、そうそう見抜けるものではない。
さて、では如何程で気付くだろうかと、其の時を楽しみに待ち受けながら手前おおよそ十米の位置まで近づけば、其の時になって漸く判別がついたのか。自分の顔を凝視したまま男の笑顔が一瞬固まり、次いでさっと蒼褪めた。
額に汗掻く男の様子を目に留め、おやおやそんなに怯えずとも、と可笑しく思いながら流れるよう

な動作で歩を進め、男の真正面に立った。
「どうなさいました、お顔の色が悪い。……まるで、」
科白の途中で、一拍の間合いを設けた。
「――そう、……『幽霊』にでも、遭ったかのような顔だ」
含みを以って口にした言葉に、男は其の目に様々な感情を浮かび上がらせた。そうして互いに見詰め合ったまま暫し待ち、男の目に鋭い光が戻ったのを確認して再度、口を開く。
「丁度、あちらの方に空いた椅子があります。少々お休みになられては如何です、」
展開によっては少々物騒なことになるおそれがある。空いた片手で壁際に設置された幾つかの椅子の方向を手で指し示し、話は其処でと促した。男もまた其れを察したか、指示を下した自分をほんの一時睨みつけはしたものの、しかし逆らいもせずに鷹揚に頷いてみせた。
「……そうですな。お気遣い、痛み入ります」
「では、こちらに」
男の傍らで自分を見詰めていた面々全てと目線を合わせ、会釈程度に頭を下げて其の場を辞した。人々の間をすり抜けながら、自分に指し示されるがまま壁際まで歩を進めている男の後姿からは、此の状況に如何なる対処をしたものか激しく頭を回転させている様子が窺えた。
焦る気持ちも、分からなくも無い。
男の後について歩きながら、悠々とした気分で其の姿を眺める。
男に残された時間は、少ない。壁際まで移動してしまえば、此の自分と相対せねばならないのだ。

だけどさァ、何もそんなに警戒しなくってもいいんじゃない。
背後を取る自分に全身の神経を尖らせているらしい男の様子に苦笑がもれた。
――もう昔とは違うンだからさ。
当然のことながら男は無手ではなく、最低でも短刀と小振りの拳銃を所持しているようだった。よくよく注意して見なければ判らないほど、巧い具合に隠されている。今となってはもう遥か昔のことのように感じられるが、軍内の施設内で戯れに威嚇してやった折の、数人の同輩と揃って青褪めていた様からは想像できないほどの上達振りであった。悪魔から逃げ回るのに必死になったあまり、苦労して入手したブツを方々に落として回ったというすっとぼけ加減さえ直せば、世界でも充分に通用するだろう。
まァ、もうちっとばかし度胸が要るがな。
感心しつつも冷静にそう見定めた。
英国を始めとする欧州各国は、先の大戦を終えて以降、他の国々に対する警戒心を更に強めている。中でも、北の大国露西亜の動向に対する緊張感は相当なものだ。無論、一度刃を交えたことのある我が国も陸海を問わず警戒に当たってはいるのだろうが、かつて在籍していた陸軍は兎も角。今の海軍の情報収集能力が如何程のものなのか、具体的に知ることはできないものの、大して華々しい逸話も聞こえてこないところをみると、左程期待は出来なさそうだった。
……尤も、秘密将校の活動云々に関して『華々しい』もクソもあったもンじゃねェけどさ。
俺が例外だっただけか、と今になって漸く冷静に受け止められるようになった当時のことを思い返

した。無論、自身の能力其れ自体の優秀さは認めるところではあるが、今にして思えば、『幽霊』だなんて渾名もある種、自国内の勢力へ向けての威嚇としてつけられたものではなかっただろうか。
しかし、其れらは全て昔の話となって久しい。
軍内に於いて誰よりも特別な存在であったあの方も、先の事件でお亡くなりになり。今の自分が思うことといえば精々、自分が抜けた穴をどいつが埋めているのか、其の程度のものに過ぎなかった。
徒然なるまま、目の前を進む男と会室中に目を走らせて歩いているうち、目的の場所まで辿り着いた。先の言葉通り男を椅子に座らせ、自身は立ったまま其の傍らの壁に上体を預けた。
ちらりちらりと横顔に男の視線を感じるが、気の無い振りでグラスを傾け続けた。
「――どういうつもりだ、」
続く沈黙に堪らず、男が先に口火を切った。
忍耐力の無いことだ、そんなことでどうする。
そんな男の行動に、些か教官紛いの感想を抱きながら何が、と呟いた。
「……惚けるな。何故このようなところに」
しかもそんな扮装までして。
許されることなら手打ちの一つでもしていただろう男は、しかし平素を装い、自分と同じく真正面に顔を向け歓談する人々の姿を眺めたまま呟いた。
「……扮装とはひどいな」
せめて変装といってくれないか。

「何が変装だ」
「だって、探偵に変装はつきものだろう」
「――ふん」
そんな戯言を口にすると、男は小さく鼻を鳴らして其れを一蹴してのけた。
「……一介の探偵風情が化けるにしては、やけに堂に入っている」
「シャーロック＝ホームズって知ってるか」
彼は探偵でありながら、同時に変装の名人でもあるンだぜ。腕っ節も強いしな。
喉の奥で密やかに笑いながらそう告げれば、今度は明らかな舌打ちを返された。
「……貴方と言葉遊びをしている暇はない」
真正面に向いたままの、男の眼に力が滲むのが分かった。男はそのままゆっくりと起立し、自分の真正面に立つ。
「そもそも、貴方がそのような姿で此処に居ることを。――ライドウ君は、知っているのかね」
矢張りそう来たか。
予想通り、少年の存在を脅しに使ってきた男の顔を眺める。
若し、今、此の場で自分が男の身分のことを吹聴して回ればどうなるか。無論、此の場に居る人々に其の発言の真偽の程は悟れよう筈も無いが、疑いは持たれるだろうし任務に重大な支障をきたすだろうことは間違い無い。其れを回避する為にお得意の方法で以って立場の逆転を試みたのだろう。
――だが、そうはいかない。

少年の存在を盾に、仕掛けてくる男の顔を見下ろした。
ついと目線を逸らし笑みを浮かべ、幾つか予想される先の展開を読みつつ、先手を取れた自らの幸運を喜んだ。
若し、此の男が先に自分を見つけていたなら、恐らく自分は色々と面倒な事態に陥っていただろう。
海軍という組織に属している男と違い、自分は単なる探偵社所長に過ぎない。ましてや、普段の姿とは似ても似つかぬ此の風体だ。依頼の関係で此の場に潜入している、という見方もあるだろうが、助手であり実質の実働部隊であるあの少年が、自分を、此の様な姿で、此の場へひとり赴かせることに反対しない筈が無いのだ。何故なら――。
再び男の頭頂部を見下ろす。
此の男の知る限りに於ける、自分と少年の関係。そして、先の事件の折に知っただろう、少年の気性から考えれば。
咄嗟に突いてくるとすれば其処だろうと、読んだ通りの行動を起こした男の姿を、冷ややかな視線で眺める。さぁ、どうしてやろうか。
目の前で足掻く獲物を目を細めて暫し眺めた後、一瞬の隙を突いて歩を進め、仕掛けた。
「――っ、」
辛うじて保たれていた男の仮面が、僅か一瞬ではあるが、剥がれ落ちた。
間近に接した距離のまま、男のタイを直す振りをして時折男の襟足や首筋に指を走らせる。指が触れるたび、男が動揺するのを巧く見計らいながら顎に微かな吐息を吹きかければ、面白いように其の

身体に熱量が増していった。
いやいや、此の程度でスタンされても困るんだがなぁと内心苦笑しながらも、意外と素直な反応を見せる男が実に愉快だった。
「……何を考えている、」
表面ではなんとか冷静さを取り繕っているものの、普段の淡々とした口調は影を潜め。すっかり上ずった声で発せられた男の問いに、こちらは何事も無かったかのように飄々とした面持ちのまま、これでよしとばかりに直したタイに軽く手を置いて一歩退き、相対する。
「何って」
「惚けるな。一体どういう積もりで、」
若し彼に知られるようなことがあったら。いくら貴方とて、只では済まない筈だ。
そんな自分の様子に何処まで気づいているのか。自分を真正面に見据えて続きを口にした男の、僅かに隼燥の滲んだ様を面白そうに眺め、そうだなと頷いた。ならばと畳みかけようとする男の言葉を遮るように片手を上げ、口を開く。
「最後まで聞け。確かに俺も只じゃア済まないだろう。あいつはああ見えて、かなり根に持つ性質だし」
こんなにめかしこんだ姿でお前さんと会ったということだけでも、暫くの間寝させてもらえなくなるだろうしな……。あまり酷いことはしないだろうけど。
彼方に目を向けながら、時折子供っぽい嫉妬や執着心を見せる少年の姿を思い浮かべ、本心からの

笑みを零した。
悪びれる素振りも見せず、自社で働く助手の少年との関係を明確に指し示す科白を嬉しそうに呟いた自分を、男は感情を込めた目線で睨み据えて来た。
嫌悪でなく、怒り、か。……成る程。
其処で初めて、男の、私的な何かを感じさせる生身の感情を正確に読み取り、確信した。
ならば次で落ちる筈。
先程浮かべた笑みとは明らかに其の質を異にする慈悲深い笑みと共に、冷酷な光を浮かべた目で男を見据えた。
思わずとばかりに男が怯んだ一瞬を逃さず、追い詰める。
「しかし其れを言い換えれば。何をしたって、『俺は』其れだけで済むってことなんだ」
ゆっくりと、言い聞かせるように淡々とした口調で囁きかける。
「――だが。……お前に対しては、どうかな」
言外に匂わされた内容に、男の顔色がさっと変わった。
何やら激しく思惑を巡らせているのだろう。額に脂汗を滲ませ始めた男の姿を楽しむ。
どうやら、少年に快く思われていないという自覚はあるらしい。
あの少年を謀る形で出会ってしまったのは自分もまた同じだから、そのことに関して自分にはどうこう言うつもりも、資格も無い。しかし自分は兎も角、此の男の場合其の後がいけない。任務の確実性を期する為とはいえ、少年の意中の相手であった自分に暴行を働くことで少年の不興を買い、また

帝都を守護する者としての矜持に傷をつけた。それだけならまだしも、此の男はどうやら自分の知らないところで更なる失態を犯してしまったらしく、探偵社で男のことが話題に上る都度、少年は明らかに不快さを滲ませていた。

シャンパンを僅かに口に含み、口の中で転がしながら男の反応を待った。

――全く、何を仕出かしたんだか。

あの辛抱強いライドウちゃんをあそこまで怒らせるなんて余程だぞと、呆れ気味に男を眺める。

何せ此の自分が、驚きのあまり二の句を告ぐことが出来なかったほどの嫌われっぷりだ。

親しさの目安から推察すれば、現役時代を通じて絶えず親交のある深川の任侠の方が真っ先にそういった感情の対象になりそうなものだが、実際に少年の目の敵にされているのは目の前で脂汗を流す此の黒子の男だった。斑駒の後より、全てが終わってひと段落した今の方が遥かに其の感情が強まっているらしい少年の様子から考えると、どうやら自分の知らぬ間に、両者の間で何らかの遣り取りがあったと考えた方が良さそうだった。其の具体的内容は分からないが、何れにせよ此の男は、少年の前では決して匂わせてはならぬ何かを匂わせてしまったのだろう。莫迦としか言い様が無い。

しかし分からないとはいいつつも、何となくではあるが予想はついていた。

こいつは、自分に執着している。

其の感情が同職に就く者として意識せざるを得ないだろう、自分の前身に対して向けられたものなのか。はたまた、只単に男としての劣情を伴うものなのか。自分には全く関係の無いことだが、しかし何れにせよ見掛けに反して独占欲の強いあの少年にとって、男が自分に向ける感情がこの上なく不

快なものであるということには間違いがない。
そもそも、少年の大事な人が此の自分であるということまで調べ上げておきながら、何故、少年から個人的な感情を向けられてしまうほどまでに自らの執着心を悟られてしまったのか。若し自分が男の上官であったなら、失態にも程があると酷く叱責しているところだ。
しかし現実として自分は男の上官ではないことに加えて、互いに別の思惑を抱えて行動しているのだから、これといって心砕いてやる必要も一切無く。ついでに言うと、利用してやったところでお釣りが来るくらい、自分は彼に酷いことをされた経緯もあるわけで。
あの時の痛みを思い出し、口元の笑みが僅かに歪んだ。
……其れを考えたら、此の程度の仕打ちは許されるだろう。
ちょっとした報酬もくれてやったわけだしと、脂汁を掻いている男の面を眺めた。
「――俺の望みはただひとつ。実にささやかなもンでな、」
眼を細めて、続きを口にする。
「お前さんは俺が此処に居たことを誰にも言わない、匂わせない。何が起こっても、気に留めない。勿論、俺もそうする」
「……」
「まァ倫理面でどうこうっていう主張も分からなくもねェんだが。……俺もお前もたかがケーアイ如きで騒ぎ立てるほどお綺麗な道歩んでるわけじゃねェしな。何より、」
――これで条件的には、フェアになっただろう。

先程の行為によって向上した自分の立場をそう指し示した。
ちらりと目線をくれてやれば、よくよく見なければ分からない程度ではあるが男の顔が赤くなっているのが判る。
其の妙に初心な反応を面白く思ったが、しかしこれ以上は下手に手出ししては危険であることも承知していたので、此処は黙って相手の返答を待つことにした。
暫しの間男の目には様々な感情が去来していたが、そろそろ肚も決まるだろう頃合に、一体何を思いついたのか。男は元のにこやかな仮面を被り直し静かに口を開いた。
「……私闘で人に害を為せば、彼は公から追われる身となる筈だ」
思わず口笛を吹きかけた。
この期に及んで食い下がってくる男を感心した目で眺める。
斑駒の下りでそれなりに知識を得ただろう程度のことは予想していたが、まさかダークサマナーと称される存在にまで其れが及んでいたとは。矢張り此の男、なかなかまめなようだ。
しかし、詰めが甘い。其の程度で動揺すると思ってもらっては困る。
これならどうだといった風に自分を睨みつけてくる男に、動揺の欠片もみせずに相対した。
笑みを浮かべたままの自分を前に、男が更に言葉を重ねる。
「ライドウ君が、ダークサマナーと謗られてもいいのか」
切り札とばかりに出された其の科白を、しかし一笑に附してやった。
予想外の反応だったのか、男は明らかに怯んだ。

予期していたこととはいえ、自分に対してならまだしも、其の名を、其の身を、貶める対象として口にされたからには容赦をするつもりなど毛頭無かった。
口元に絶えず笑みを浮かべたまま、冷ややかな声を発し、威圧する。
「――何か、誤解しているようだから言っておく」
確かに、私利私欲のために其の力を行使するサマナーはダークサマナーと呼ばれ。カラスから追われる立場となるが。
「そうなるにはもうひとつ、条件があってな」
「……条件だと、」
「そう」
……俺もまぁ、そんなに詳しいわけじゃないンだが。
そう前置きして続きを口にする。
「――『カラスの意思に反することさえしなければ』、大抵のことには目を瞑ってくれるってことでもあるのさ」
「……まさか、」
動揺した男の面を面白そうに眼を細めながら見据えた。
あれ、疑うの。
「莫迦だな、お前。――よく考えてみろ」
そもそも、あいつらはさァ。

「――『あの』陸軍の中枢近くにまで関わっておきながら、其れでも裏切る道を選んだ此の俺を。……飼おうって連中なんだぜ」
まともな訳ねェだろう。
何を判りきったことをと、呆れた響きを滲ませる。
「態々、方々に手を尽くしてまでな。……全く、ご苦労なこった」
ああそれから、ついでに付け加えておくと。
一歩踏み出し、更に相手を追い詰める。
「さっき言ったのもまた、あくまでも『サマナーの力』を使った限りに於いてであることを、ちゃんと覚えておいた方がいいだろうな」
小さく鼻を鳴らし、幾らでも抜け道はあるのさと肩を竦ませ、そう締め括った。
任務で得た知識も含め、自分の頭の中には此の国だけではなく世界各国の機密がかなりの割合で収まっている。そんな自分を、たとえ手飼いとはいえ探偵として世に送り出すということは、軍にとってかなりの危険を冒すことになる。当然、要請を受けた上層部はかなり抵抗した筈だ。
だが、そんな陸軍を抑えてまで、カラスは自分をとったのだ。
其れは即ち、彼らが『自身にさえ逆らわなければ良い』という考えをもっていることに他ならず。
そして、其れの指し示すところは。
少年自身の戦い振りを実際に目にしたことのある男もまた、其の結論に達したのか。一度目を瞑って雑念を振り払い、冷静さを取り戻した目で自分を見返した。

「……分かった」
「分かってくれた、」
そりゃア良かった。
若し状況が許すなら、手を叩いて見せたであろうほどに喜びを見せる自分へ向けて、男は心底忌々しそうな視線を向けた。
「再三口にさせるな。貴方も私も、誰とも会って無いし、話もしていない。そういうことだろう」
「ふふ。――悪いな、」
昔の俺だったら、一度くらいはポってやったりしたンだけど。
「……何、」
上機嫌にグラスを傾けつつ満足げに呟いた自分の言葉に、ほんの僅かな間を空けて訝しげな一瞥が向けられた。グラスを掲げ、金色の液体越しに平然と其の視線を受け止め、『意味が判らないわけではないだろうと仄めかす。
「今はもう、どんなハイジー相手でもブルームする気になれねェのさ」
当然、野郎は言わずもがなだ。
「――だから、悪いな」
満面の笑みを浮かべてそう締め括れば、渋面を浮かべた男は舌打ちを寄越した。
「戯言を」
しかしほんの一瞬ではあるが、男の目に何らかの熱情らしきものが走ったのを自分の目は見逃して

はいなかった。
だが即座に元の冷静さを取り戻した男の姿に、多少のつまらなさと同時に奇妙な満足感を覚えた。
無言で踵を返した男の背に声をかける。
「あれ、何処行くんだよ」
「私には私の予定がある。口出しするな」
「えー、お前さんも未だ暇なんだろう」
だったら俺と一緒に此処で待たない、
周囲を見渡した後、力を無くした男の視線から、男の標的もまた未着であることを察し。誘いをかけてやったが、振り向くと同時に睨みつけられてしまった。
「――断る。……では、これで失礼します」
傍近くへ寄って来た、他の来訪者を意識して変えられた科白を口にして、男は返事も待たずにそそくさと人波に紛れていった。其の迷いの無い足取りに、あららつまんないのと肩を竦める。
唯一の知人に振られてしまった今、標的がやって来る其の時まで、此処で一人、手持ち無沙汰な時を過ごさなければならないようだ。
嗚呼、失敗した。そう思い、壁に背を預けた。

それからどれ程待っただろうか。入室してくる人々と、早々に帰路につく人々とで混雑し始めた入

り口付近に留まり、周りの迷惑も顧みず、誰かと立ち話をしている標的の姿を捉えた。
傍目から見てもそうと知れるほど気合を入れた形をしている標的の方へ、人波を避けながら歩を進める。途中、出くわしたボーイにグラスを返し、先程話しかけられた紳士の前に差し掛かったところで懐中時計を取り出して眺めれば案の定、お帰りですかなと声をかけてくれたので、急用が入っていると済まなそうに微笑みを浮かべながら軽く挨拶を交わした。
標的までほんの数米といった位置まで近寄れば、つい数時間前に探偵社で聞いたものとは別人かと思わせるほどのへりくだった声が、周囲のざわめきの間を縫って耳に届き始めた。どうやら大きな取引を任せてもらえるよう、頼み込んでいるらしい。ちらと見詰めた話し相手は、ほんの小さな記事ではあるが、新聞の経済欄で顔つきの写真と共に目にしたことのある、名の通った輸入商だった。
……成る程ねぇ。
脇目も振らず、世辞と売り込みを口にし続けている標的の姿をじっくりと眺め、納得した。
そりゃ胡散臭い探偵所長を相手にするより愛想も良くなるよな。
更に接近し、強引に割り込んで注目されるようなことなど無いよう人の流れを読みながら、調子を合わせて標的の背後を取った。入室してくる他のゲストたちを避ける形で左手を上げ、其の背中に自然に身を寄せる。
そして最接近した頃合を見計らい、素早く手首を翻した。
ほんの一瞬、胸に感じたのだろう僅かな痛みに、何事かと眉を顰めながら標的が振り向く。
「……嗚呼、これは失敬」

手を元の位置に戻し、会釈と共に其の身に触れてしまったことへ詫びを入れた。
何を言うより早く丁重な謝罪を入れられた形となった標的は、また状況が状況なだけに其の場で怒り出すわけにもいかなかったのだろう。もごもごと何事かを呟いた後鷹揚な態度で頷いて見せた。
再び頭を下げ、標的の話し相手にも軽く会釈し、そのまま出口へと向かった。
作業自体はこれっぽっちで済むのに、思いの外時間をかけてしまった。
早く来いよ全く、と身勝手なことを思いながら帰宅する人々の波に紛れ、手近なボーイに札を渡しクロークに預けておいた外套を受け取った。
「車をお呼び致しましょうか、」
「ああ、頼むよ。有難う」
気を利かせてくれた発言に頷き、ホテルの玄関先へ出た。
暖かくなってきたとはいえ、流石に夜は冷え込む。小さく身を震わせ白い息を吐きながら車を待ち。時折すれ違う着飾った人々とそつのない挨拶を交わしつつ、次にとるべき行動を算段した。
口止めは成功したものの、自身の行動によって勘付かれてしまうようなことがあれば元も子もない。より入念な始末をつけなければ、自分に関することに限り、一種異様な勘の鋭さを発揮するあの少年を誤魔化しきることは不可能だろう。
カラスにも連絡いれとかねェとな。
少年が着任して以来漸く自分に対して連絡手段を与えるようになった相手の、しかし面倒としか言いようの無い手順を思い浮かべ、あれはどうにかならないもンかねェと内心舌打ちしながら横付けさ

れたタクシーに近寄った。
乗り込む間際、未だ華やかな気配を発し続ける背後を徐に振り返り、聞き取れる者など到底居ないだろう程の声量で、小さく呟いた。
「あの子がンな事するわけねェだろう。……莫迦な奴」

狭い車内に長身を折り畳むようにして乗り込み、目的地を訪ねる運転手に、自らの風采を省みて、不自然に聞こえない程度に名の通ったホテルの名を告げた。
車の振動に揺られながら、世間話をするでもなく無言で電飾煌く夜の街を通り過ぎる。
窓の外を何気に眺めていたら一瞬、見覚えのある黒マントが目の端で翻ったような気がした。
――まさか。
素早く後方に目を走らせるも、其の通りは遥か遠くに流れていく。しかし態々タクシーを停めさせて確かめに行くわけにもいかず、気のせいだと跳ねた心臓を宥めた。
……あのライドウが、何の異変も起こっていない今、こんな夜更けに銀座の街を彷徨う筈が無い。
黒マントと見えた物影も、恐らく蝙蝠傘の切れ端か何かだろう。全くらしくないと思い、神経質になっていた己に対する苦笑が口元を歪ませた。
そうこうしているうちに、やがて車は物静かな佇まいのホテル前に到着した。紙幣を数枚渡し、釣銭を丸ごと与えた後其の場に立したまま、車が立ち去るのを見送る。

エンジンの振動音も遥か彼方へ過ぎ去ったのを見計らい、通りに素早く目を走らせた。自分より他は人気が無いことを確認し、ホテル玄関前のステップを上るで無く、其の脇の、電灯の無い闇夜の小道に身を滑り込ませた。

そしてそのまま路地を素早く抜け、ちょっとした大通りで新たに円タクを捕まえて深川駅、と一言告げ、乗り込む。

此の姿のまま、探偵社へ戻ることは出来なかった。

姿を隠すという意味でなら玉乃井でも構わなかった。どちらかというと寧ろ彼処の方が痕跡を完全に断ち切ることが出来たのだが、今の自分はどこぞの御大尽もかくやと思わせる形だ。車を呼んで夜遊びと見せかけるにも、悪所を告げて印象に残すより、立場に相応しい其れ相応の場所を告げた方が自然だった。

窓の外で、遊郭の帰りであろうかと思われる客を乗せた俥が、小さな灯篭を点しながら駆け抜けていく。其の様子を車内から横目で眺めながら、全くお盛んなことでと呆れたが、傍から見れば今の自分もまた彼らと似たようなものだということに気付き。そんな己の姿を小さく嗤いながら懐から懐中時計を取り出し、針を読んだ。

帝国ホテルから退出した時刻より、優に三十分は経っている。仕掛けたのがほぼ同時刻だったことから考えると、そろそろ騒ぎになっていることは間違い無いだろう。手応えもあったことだし、仕損じてはいない筈だ。

ふう、と満足げに溜息を吐いた。

漸く到着した駅の付近で少々歩き、暇そうにしている俥屋を捕まえた。とある中間の楼閣の名を告げて、到着するまでの短い間ではあるが目を伏せながら暫しの休息を取ることにする。

しかし、背に腹は代えられぬこととはいえ、ホテル側には少々悪いことをした。暫くの間とはいえ、彼処は帝都を代表するホテルであるから長く見積もっても精々二日といったあたりだろうが、それでもあの豪奢なロビーに無粋な警官の姿が右往左往するというのは、さぞや目障りなことだろう。暫くの間、客足が遠のくかもしれない。やれやれ、悪いことをしたものだ。

俥から降り、目の前の暖簾を潜れば、此の改まった姿に金の気配を感じ取ったか。愛想よく進み出てくる遣り手に妓の名を告げる。だが、少々立て込んでいるようで、直ぐに通されるというわけにはいかなかった。

嗚呼そういえば今日は週末だったっけと思い至り、頷く自分に遣り手は申し訳なさそうに侘びを口にした。そうして何を思ったか、何処ぞから見世の妓のブロマイドを貼り付けた冊子を持ち出して、頁を繰り美しく着飾った妓たちを次から次へと指差しながら他の妓を薦められた。

遣り手というものは、何時の時代も変わらず商魂たくましい。

内心苦笑を浮かべながら丁重に断りを入れ、時間がかかっても良いからと先に部屋にだけ案内を頼めば、割合あっさりと退いてくれた。

妓夫太郎に導かれるまま楼上へ上がる。

膳は断り、前を練り歩く小売から何か適当な小鉢と酒をを見繕ってくれるよう、心づけを含めた数枚の札を渡した。それから幾何の時も経たない内に先程の妓夫太郎が再び部屋に舞い戻って来、銚子と小鉢の乗った小振りの膳を置いて静かに去って行った。

ひとり、取り残された部屋の中で明かりも点けずに寛ぐ。

喉下まできっちりと締め付けられた堅苦しい服を全て脱ぎ去り、緋色の長襦袢を失敬して着込んでしまえば、それだけでもう随分と楽だった。『あれ』は万が一にも他の者の目に触れることがないよう、ハンカチーフで包んで釦つきの内ポケットに仕舞い込んでおいたから、探られでもしない限り大丈夫だろう。

少々の酒と料理をつまみながら一息つけば、自然一連の出来事が脳裏を過ぎていく。

自らの行動のひとつひとつを繰り返し反芻し、幾度か照合した結果、目立った失態は何一つ犯していないという結論に達した。其処で漸く、深く、安堵の息を吐いた。

久し振りの『お仕事』だったが、巧くいって良かった。

尤も、翌日の知らせを受けないことには完全に遂行したとは言い難いことは承知している。しかし其の手応えから、翌日の結果は半ば確信できてもいた。

先立って地下造船所に単独潜入した時には赤面ものの失態を犯してしまったが、あの時とは状況が違う。こちらの方が元々の自分の本業に近いものがあった分、休養期間が長かったとはいえ勘が根強く残っていたようで随分と助かった。一時は自信を喪失しかけたものだが、なかなかどうして。油断してはならないしする気もさらさら無いが、今でも充分通用するようだ。

嬉しい事実を前に、自分の頬がほんの少し、緩んだのを感じた。
それにしても、定吉の野郎に出くわしたのには流石の俺も驚いた。
赤マント事件の折、異界に迷い込んだ女性記者のカメラに写っていた奴の、陸軍兵の姿よりも尚手の込んだ変装と、あの状況になってさえ自分に食い付いてきた根性を思い出し、全くやればそれなりに出来るンじゃねェかと、自分の中での彼に対する評価を少々ではあるが上げてやることにした。
――少年のことを脅しに使おうとしたのは、大いに間違いであったけれど。
緊張が解けるにつれてじわじわと襲ってくる疲労感に、すっかり怠惰な探偵所長としてのご身分に慣れてしまった自身を改めて自覚させられ、はぁ、と切ない溜息が漏れた。
しかしまぁ何にせよ、……疲れた。
遠くの座敷から微かに漂ってくる手拍子や長唄、三味線の音、そしてさざめくような笑い声にぼんやりと耳を澄ましていると、すっと静かに襖が開けられた。
指名した妓が其の隙間から細い身を滑らし、襖を閉めている。
「……お待たせなんして」
三つ指をつく妓に、盃片手に振り向いた。
服装は普段此処に居る時と左程変わりは無かったのだが、肝心の化粧は落していなかった所為で妓は自分が誰なのか分かってはいないようだった。
無理も無いかと納得し、ずっと昔に取り決めた合図を示せば漸く判ったのか。妓は驚愕で目を見張った後、するすると傍近くへ寄ってきた。

相手が何か言うより先に口を開く。
「……一晩だけ泊まらせて貰う。他所へ行っても構わない。ただ、静かに休ませてくれ」
要求だけ一方的に突きつける形になったが、妓は僅かに戸惑っただけであとは無言で頷いた。
自分が口にした要求自体、彼女にとって損どころか、寧ろ何もしなくとも金がもらえるということを示すわけだから、それもまた当然の反応だった。
頼むよ、と念押しながら、ついでに昼間依頼人から押し付けられた金を妓の懐に突っ込み、盃を置いた膳を脇に避け、其の場にゆるりと横になれば、妓は寝床の敷いている部屋を指し示した後一礼して静かに下がっていった。
再びひとりになった広い室内に、深い深い溜息が響いた。
疲労と高揚感の残る身体を窓辺近くに横たえ、眠気が襲ってくるまでの間、夜空に皓々と光る月を眺め続けた。

一夜明け、早朝の内に楼閣を出た。
足の向かう先は当然、大國湯だ。
俥は呼ばず、あまり目立たぬようタイも締めず多少衣服を着崩した形で、朝靄の中歩を進めた。
湯屋の前では身形は良いものの、見知らぬ男の姿に不審がる手下どもに多少威嚇されたが、小さく鼻で笑い、軽くいなして湯屋の暖簾を潜った。

湯道具を受け取る際に少々てこずったが、流石あの任侠の贔屓にしている湯屋の主とでもいおうか。『鳴海』の仕草を見せればそれだけで話は通った。驚きで目を見張ったものの、疑ったことへの侘びの他は何も言わず道具を差し出してきた主に笑いかけ、お馴染みの位置で衣服を脱ぎ去った。

手拭や洗髪剤といった何時もの道具に加え、化粧落しまで手にして扉を開ければ、もうもうと湯気でけぶる洗い場に紋々の入った背中が並ぶ何時もの光景が広がっている。

物々しい雰囲気に怖気付くどころか笑みを浮かべながらかけ湯をし、湯船の縁に腰掛けている任侠の近くまで足を運ぶ。

「おはようさん」

「……エラい珍しい時間に来たもンやな。遊んできたんか」

全く別人の風貌をしている自分を見ても、左程驚きもせず返事を返した任侠に静かに微笑み、声を張り上げずとも会話が出来る近場の洗い場に腰を下ろし、桶に湯を溜めながら答えた。

「ちょっと匂いも気になるンでな。落としに来たんだ」

「……ふん」

起き抜けで少々乱れてはいるが、整髪料のつけられた髪と、身体から漂う何時もとは違う香りに任侠は目を眇めた。

じろじろと観察されている気配を感じたが、素知らぬ顔で化粧を落とし髪を洗った。

反応を返さないことで返事に代えると、任侠は小さく鼻を鳴らした後大黒様の彫られた背を向け、湯船に浸かった。湯船から流れる水音を聞きながら手拭に石鹸を泡立て、嗚呼そうだ、と声をかける。

「以前お前に預けた俺の服、今何処にある」
「……後で案内させたるから、早よその胸糞悪うなる匂い、落してまえ」
朝っぱらから鼻が曲がりそうでかなわんわ。
どうしても水面からはみ出てしまう大きな肩に、片手で湯をかけながら任侠は答えた。
香水の類は嫌いだと、常日頃から主張している任侠には悪いことをした。
苦笑を浮かべ、はいはいと呟きながら身体を洗い、湯をかぶった。
「……何しとンねん。犬っころやあるまいし」
腰を上げ、遠慮なしに任侠の隣に浸かり、ふんふんと鼻を鳴らして自らの腕の匂いを嗅ぎだせば、眉を顰めた任侠に不審げに問いかけられた。
矢張り鼻が慣れてしまっているらしく、違いが分からない。だがそれでも鼻を鳴らしつつ口を開く。
「いや、……香水って結構匂いが残るだろ。ちゃんと消えてるかなと思って」
不確かながらも両手首の内側は確認したが、耳の下方部分だけは自分で確かめることが出来ない。どうしたものかと悩んだが、大丈夫だろうと思い直していたら突然、自分の隣から伸びてきた腕が自分の頭を抱え込んだ。盛大に跳ねた湯が顔にかかり、ずぶぬれに近い状態になる。
「ちょっ、何すンだよ、」
粗略な扱いに抗議する自分を無視して任侠はそのまま首に顔を寄せた。彼の意図を悟り、せめて一声かけろよなと内心ぼやきながら手で顔についた雫を拭い、大人しく任侠の腕に身を任せる。
任侠は幾度か場所を変えながら鼻を鳴らした後、抱え込んだ自分の頭をぞんざいにぽいと放り出し

た。またもや、ばしゃりと湯をかぶる。
前髪から伝い落ちる雫の間から睨みつける自分にはお構い無しに、任侠は腰を落ち着けた。
「石鹸の匂いにはあれこれ言われるかもしれんけど、他はまぁいけるやろ」
何か一言言ってやろうと幾度か口を開閉させたが、彼方を向いて何やら思案に暮れている任侠の横顔を見詰めて思い至った。
どうやら此の様子では、彼らに悟られたくは無いほどの、後ろ暗いことをしてきたということだけは確り悟られているらしい。
「……すまんね」
抗議の言葉を引っ込め、波打つ水面を見詰めながらぽつりとそう呟けば、ふんと鼻を鳴らされた。
「今更や」
「そりゃそうだ」
はは、と軽く笑えば小さな舌打ちが返って来た。
「阿呆、ちったぁ遠慮せぇ」
帰って如何なる言い訳をしたところで、確実に探りを入れに来るだろう少年をどうあしらうか。
そのことについて今から頭を悩ませているのだろう任侠の心遣いに感謝する意を込めて、降りかかる湯を避けずに態と頭からずぶぬれになり、垂れる雫の間から小さく笑った。

「ただいまぁ」
「……お帰りなさい」
簡素な書置きひとつ残して姿をくらまし、朝帰りまでした自分に少々怒りを抱いているのだろう。少年は背を向けたまま、随分と余所余所しい口調で返してきた。
普段の大人びた、そつのない振る舞いとは比べ物にならないような子供っぽい反応も、自分に懐いているが故だと思うと笑みがこぼれる。
「ん～ちょっと友達と遊んできちまった。はいこれ、お土産」
「何ですか」
甘く爽やかな香りの漂う洒落た印刷の紙袋と、小さなブリキ製の缶を差し出す。以前店の前を通りかかった時に、これはと思い目をつけていた一品だ。
「今銀座で流行の檸檬の洋菓子。それと、おまけの琥珀糖」
美味いんだぜ。
そう言って笑いかけてやると、お年頃の少年は拗ねた顔つきになった。
「……またそうやって人を子供扱いする。誤魔化されませんよ」
何処に行っていたんですか。おまけに朝帰りなんて。
口ではそう言いつつも気にはなるのか。差し出されたままの紙袋に、ちらりと目線を送りながら詰ってくる少年に、情人として疚しいことはしちゃいないと肩を竦めて言い返す。
「だってしょうがないだろう、久し振りに会う友人と飲み交わすうちに電車が無くなったんだ。タ

クシーを利用するにも所持金に不安があったし、丁度いいからそいつの家に泊まらせてもらったってだけ。細君も居られたンだから、お前が心配するようなことなんて何も無ェって。……何だよ、これいらないのか」

何時まで経っても受け取ろうとしない紙袋を振ってみせると、甘いものには目が無い少年は、其れとこれとは別だと言わんばかりに美しく包装された包みを両手で受け取った。

「菓子に罪はありません。有難く頂戴致します」

素っ気無い態度を見せながらも、手にした袋から漂う甘い香りに、ほんの少しだけではあるが表情が緩んでしまっている少年の顔を見て、微笑ましさに笑みがこぼれた。

「全く、素直じゃないんだから。……ところでライドウちゃん。俺朝飯食ってないんだけど」

弓月の制服のポケットにドロップの詰まった缶を突っ込んでやりながらそう伺うと、もう十時ですよ、という全く以ってつれない言葉と共にふいと背を向けられた。そのままキッチンへと向かう少年の後姿を眺めながら、くたびれた身体をソファーに投げ出した。

いそいそと己が膝の上に乗り込んできた黒猫の毛皮に指を潜り込ませ、ゆったりと撫でさする。ふわあ、と大欠伸をした彼はふと何かに気付いたように自分の腹に摺り寄り、ひくひくと鼻を鳴らした。

翠の双眸がすぅ、と細まる。

石鹸で入念に磨き上げたつもりだし、任侠のお墨付きも戴いたのだが、どうやら獣の鼻は誤魔化しきれなかったようだ。

ほんの僅かに残っているのだろう香水の匂いに眉を寄せ、見上げてきた黒猫の双眸から目線を逸ら

さず、苦笑を浮かべて宥めるように背を撫でた。暫くの間彼はもの言いたげな光を浮かべていたが、こちらが譲る気配を見せないことに諦めたか。やがて無言のまま頭を伏せ丸くなってしまった。

不問に付す、ということらしい。

こちらもまた何も言わずにさらりと彼の頭を撫でた。

此処数ヶ月の間すっかり絶えていた筈の情人の朝帰りに、口ではなんだかんだと拗ねてみせながら、しかし一方で大人の付き合いというものも尊重してくれる傾向にある少年は、自分の要求どおり軽食でも用意してくれているのだろう。キッチンの方から何やら用意している音が聞こえた。

手を温めるふかふかした彼の毛並みと、一定の調子で上下し続ける腹部を眺めているうちに昨日からずっと張り詰めていた心が次第に緩み、ソファーの背にゆっくりと身を沈めた。すっかり寛いだ心持になり、膝の上の彼と共にうとうととまどろんでいると、キッチンに居る少年がそういえば、と言葉を発した。

「……何」

欠伸をしつつ返事をする。火を使っているからか、少年は戸口から顔を覗かせることもなく応えを返した。

「昨日の夜半過ぎに、珍しい方にお会いしました」

「へぇ。……一体誰と」

大して気のなさそうな調子で落ちてくる瞼をこすりながら続きを尋ねると、少年はたっぷりの間合いを空けた後、川野さんです、と口にした。

「……定吉と、」
一気に眠気が引いた。
しかし其れを表に出すわけにもいかず、伸びをしながら何気ない調子で確認する。膝の上の黒猫には恐らく瞬間的に強張ってしまった身体に気付かれただろうが、離れた場所に居る少年にはそうでなかったらしく、ええ、と肯定の返事が返って来た。
「髪も伸ばされていたし、服装もまた違ったものとなって居られましたけれど。……あれは川野さんだったと思います」
「ほー。……一体何処で」
落ち着け。未だそうと決まったわけじゃない。
自らを宥めながら、何気ない風を装って質問する。
「あれは確か、夜中の十時を過ぎた頃合に、銀座近くの大通りで」
背筋をひやりとした汗が流れた。
矢張り、あの物影は。
危うい事実を前に鼓動が跳ねた。
若し其れが事実であれば、自分は危うく少年と接触してしまうところだったということになる。
密かに焦る自分の様子など目に入ろう筈も無い少年は、淡々と続きを口にした。
「また何かの任務に就いていらしたのか、普段とは全く異なった扮装をなすってらっしゃいました」
早まった鼓動を落ち着かせながら、今度は見破れたのかと問い質せば、少年ははいと応えを返した。

「一度はすっかり騙されてしまいましたからね。早々、同じ過ちを犯すようなことは《ライドウ》の名が許しません」
皿でも取り出しているのか、かちゃかちゃと陶器が重なる音と共に少年の声が響く。
其の凛とした響きの中に、ほんの少しだけ混じった不快感と怒りを感じ取り、これは相当根に持っているらしいと可笑しくなった。
「まァ、あいつには目立つ目印があるからな」
見抜けた切欠は其処だろうと指摘してやれば、悔しさを滲ませた口調で少年は答えた。
「はい。……口惜しいことですが、其れが無ければ判別できないほどの化けっぷりでした」
「仕方が無いさ、奴っこさんも其れが本職なんだから」
「何時かは、其れが無くとも見抜けるようになってみせます」
「――期待してるよ」
ワハハ、と笑い声をあげながらそう告げれば、部屋を隔てているにも関わらず少年の舌打ちが聞こえてきた。其の素直な反応にくくく、と喉の奥で笑い続けていると、現状ではそんな仕打ちも止むを得ぬと観念したのか、少年が溜息を吐いた音が聞こえた。
悪い悪い、と軽く謝罪し、自分の膝の上で素知らぬ顔でまどろみ続ける黒猫の背を撫でながら話しかける。
「……でも何だってまたそんな時間に銀座へ行ったンだ、」
生真面目なお前が、珍しい。

不思議に思ったのは事実だったので、其れをそのまま声音に乗せて問い質せば、少年は嗚呼それは、と口を開いた。
「夕餉が済んだ頃合に、朝倉さんがいらっしゃいまして」
――そういうことか。
得心がいき、其の可能性に思い至らなかった自らを叱咤しながら、少年と会話を続ける。全く、昔と今とでは環境も違うのだ。そんなことでどうする。
「タヱちゃんが、」
「ええ。――暫くの間待っていらしたんですが、一向に帰ってらっしゃらないので」
少々申し訳なく思ったのと、夜も遅いのにご婦人を一人で帰すわけにもいかず。
「今日はこのまま直帰だと仰るので、ご自宅までお送りしたのです」
「……成る程ねェ」
こりゃア今度会った時にまた何か厭味を言われちまうな、と髪を摘みながら苦笑した。
其処まで話したところで、少年は金属製の盆に二客のカップと先程渡した洋菓子数個が並んだ皿、そして深皿を一枚乗せて現れ、其れらを卓子の上に並べながらそういえば、と口を開いた。
「川野さんは、妙に狼狽なさっておいでした」
任務に差し障るとでもお思いになられたのでしょうか。
不思議そうに呟かれた其の科白に噴出しそうになるが、腹に力を入れて堪える。座り心地が悪くなったのか、黒猫が片目を開けて抗議するが、こればっかりは仕方が無い。

……あいつもさぞかし驚いたことだろう。
口元を笑みの形に歪めながら、其の時の彼の心持を推察した。
夜半十時を越した頃合となると。――自分と、あの遣り取りをした後、ということになる。
只でさえ少年に対して苦手意識を抱いている男だ。あんな風に脅しつけられた直後に遭遇してしまったのなら、夜の闇に溶け込むかのような漆黒を身に纏った少年の姿は其の目にさぞかし恐ろしく写ったことだろう。
「俺は川野さんが何を為さろうとも別段興味は無いのです」
……其れが帝都守護と、貴方に関わることでなければ。
「眼が合っただけで、あんな風に逃げられる謂れなどございません。全く失敬な」
憮然とした面持ちで、何も知らない少年はそう言い残し、再びキッチンに戻って行った。
其の黒い後姿を眺めながら、全くあいつも運の悪い男だと苦笑した。

社内に漂い始めた珈琲の香りを楽しみながら、中央に据えられた卓子から本日の帝都新報を手に取った。膝の上で眠る黒猫を取り落とさないよう気をつけながらソファーの背にゆったりと凭れ、開いた第一面を一旦流し読み。次いで、目当ての三面を開いた。
小さなものではあったが目的の記事を見つけ出し、其処に記されている内容に満足した。黒猫もまたちらりと紙面に目を向けたようが、其処に小さく載せられた写真を一瞥して鼻を鳴らしただけで、

後は興味なさそうに顔を背けた。
「随分と熱心に見ておいでですね」
何か面白い記事でもありましたか。
珈琲を湛えたカップを差し出しながら、少年が問いかけた。
「ああ、面白いというか、お気の毒にというか」
自分の膝からひらりと飛び降り、卓子の上に登っていく黒猫の後を追う形で腰を上げ、新聞を折り畳みながら椅子へと腰掛けた。曖昧な返答に小さく首を傾げる少年に座るよう促す。
「まぁ、先ずは腹ごしらえさせてくれよ」
先に取れと顎で促せば、少年は小さく会釈した後土産の菓子へと手を伸ばし、頬張ると同時に口中に広がった甘味に嬉しそうに口元を綻ませた。
初めて会った時に神田でパンケーキを馳走してやった折に目にしたのと全く変わらぬ少年の幼い笑みに、そういえばあの時も此の顔に絆されたんだっけ、と微笑ましく思い返しながら、自らもまた、その内の一つを手に取った。
渦巻状に形を整えられ、オーブンで焼かれた柔らかい生地。其の間に練りこまれた薄黄色のクリィムには、爽やかな檸檬で風味がつけられ、香ばしい焼き色のついた表面にデコレートされた真白いクリィムの上には、細やかな賽の目に刻まれた檸檬の皮の砂糖漬けがまるでヘリオドールの欠片のように金色に煌いていた。
こういった菓子はあちらで良く見掛けたなと思いながら、随分と嬉しそうに頬張っている少年に微

笑みかけ、徐に一口齧れば、檸檬独特の爽やかな風味が口中に広がった。
疲れた身体に染み渡るような甘味に身を委ね、時折珈琲を口にしながらゆったりと味わう。
「……うまいな」
呟くように口にした感想に、向かいの少年が力強く頷いた。
黒猫は、一度は皿に近寄って臭いを嗅いだものの、途端に眉を顰め、それっきり興味の欠片も示さなくなってしまった。それどころか、遥か遠くの方へ陣取ってしまっている。
柑橘類の匂いが猫の鼻に堪えたか。ちょっと悪いことしたなぁと、猫の習性を失念して商品を選んでしまったことを悔いたが、面と向かって侘びたところで彼には鼻で笑われるだけだろう。
最初のひとつだけを平らげた後は手をつけず、さり気無く皿を少年の方に寄せ、頬杖をつきながら珈琲を啜る。
それなりに満たされた腹を抱えながら、菓子を頬張り、何時に無く嬉しそうな気配を存分に振りまいている少年の姿を愛でた。檸檬の香りに眉を顰めていた黒猫も、随分とご機嫌な様子の少年の姿を微笑ましく思ったのか。ミルクを舐める合間にちらりちらりと目線を流しては其の都度、優しい光の宿った翠の双眸をほんの僅かに細めていた。
全く、素直でないお目付け殿だ。もうちょっと素直に可愛がってやりゃアいいのに。
微笑ましく思うが、目付けとして責任を負う対象である少年に接する態度には、色々と考えるところがあるのだろう。黒猫は何時もこんな調子だった。
全員の腹が満足し、それなりに落ち着いた空気が流れたところで、先程折り畳んだ新聞を手に取り、

件の記事を指し示した。カップを置き、覗きこんだ少年の目が僅かに見開かれる。
「――これは、」
つい先日解決したばかりの。
そう呟いて眉を寄せる少年の様子を、さり気無く観察しながら頷く。
「気の毒にな」
心不全の疑い、だってさ。
そう呟く自分の言葉を聞いているのかいないのか。少年は沈痛な光を眼に浮かべていた。しかし構わず、言葉を続ける。
「激務と心労が重なった所為かもしれない。可哀相に」
先程までの上機嫌さが嘘であるかのような少年の落ち込みように、静かな目線を向け、慰めの言葉を口にした。
「……もう少し早くに来てくださったら、こんな結果にならずに済んだかもしれない」
「そんなこと言っても始まらない。過ぎたことさ。……此の依頼人は、運が無かった。お前はやれるだけのことをやったんだ。現に依頼は完遂している。気に病むな」
そう言って手を伸ばし、俯き加減の頭を孚帽越しに撫でた。
少年は暫くの間俯いたままだったが、やがてゆっくりと頭を上げ、静かに頷いた。
目を合わせたまま腰を上げ、頭上にあった手を滑らせ、同じく腰を上げた少年の顎を緩やかに捉えて食むように唇を合わせた。指の甲で少年の頬を撫でながら口唇を開き、舌先で其の輪郭を辿る。

煙草を好む所為か、はたまた体質故か。乾燥しがちな己が其れとは異なり、しっとりと柔らかな、今は檸檬の芳香を放つ少年の、形良い唇の感触を楽しんだ。

仕掛けられた方の少年はといえば、只為されるがまま身を任せている風に見えて時折、其の口唇を僅かに開いて表面で遊ぶ自分を誘い込むかのような動きをしてみせたが、しかし其の都度中を掠めるだけに止めて尚も己が表面のみをなぞっていく自分に苛立ちを強めているようだった。

かわいらしいことだ。

そう思い、薄く笑みを浮かべた自分に気付いたのだろう。隙ありとばかりに自分を捉えようと動いた少年の手を寸でで躱し、素早く顔を引き離した。

そして今眼前にあるのは、邪魔な卓子さえなければと悔しがる、あからさまに拗ねた少年の顔。

歳相応な其の姿に笑い、引っ込めた手を伸ばして今度は顔を背けていた黒猫の背中をさらりと撫ぜながら、未だ恨みがましく見据えてくる少年へ何事も無かったかのように声をかけた。

「ところでライドウちゃん」

「……何でしょう」

「話は変わるけど、もしかして此の洋菓子、結構前から食べたいと思っていたとか、」

察したことを何気なく問いかければ、何だそんなことかとばかりに頷かれた。

「存在自体は、前々から存じ上げていました」

しかし、自分のような学生が買い求めるには少々障りが感じられまして。

そう言って顔を隠す少年の仕草を目にし、お前なら許されるだろうよと口にしながらも、分からな

いでも無いな、と納得した。
確かに此の菓子は銀座で売っているということもあって、師範学校に通う学生が買い求めるには少々値が張る代物だった。現に自分が買い求めし折にも、他に並んでいる客はといえば既に成人を迎えているらしき男女ばかりであったことを思い出した。
自分たちの前や筑土町内に於いては甘味に目が無い自らの嗜好を隠さなくなったとはいえ、未だそういったことに気恥ずかしさを覚える年齢である少年にとって、白昼堂々銀座の街中でそのようなものを買い求める己が姿を世間に晒す、ということは耐え難いことなのだろう。
しかし、それにしても。
「……お兄さんは嬉しいよ」
「は、何がです、」
何の脈絡もないことを突然口にされた少年は、訝しげな表情を浮かべた。
「お前がちゃんと周りに興味を持つ余裕を持ってくれるようになって」
嬉しさに微笑みながら返した言葉に合点が行かないのか。少年は小首を傾げて見せた。
「……そうでしょうか」
「そうですよー。それなりの歳をした若人が、銀座なんて所に行って。脇目も振らず目的だけ果たして帰ってくるなんて普通ありえませんからね」
「そうは仰られましても。……依頼を抱えている時に呑気に買い物なんてできやしません」
真面目な顔で反駁してくる少年へ向けてそうじゃない、と軽く笑い声を上げて否定しながら、皿の

上に残った最後のひとつを取るよう促した。
菓子如きで誤魔化されないぞ、という警戒を目に浮かべながらも、確りと其れを手に取る少年の姿を片肘を突いて眺めながら口を開いた。
「そりゃアそうだけどな。……初めて一緒に銀座へ行った時のこと、覚えてるか」
少年は口元へ運んでいた手を止め、眉宇を寄せた。
「俺は良く覚えているよ。……最新のファッション、流行の音楽、そして西洋式のレストランが立ち並ぶ中、お前は真っ直ぐに、前だけを見据えていた」
「……それは、」
其の時の様子を思い出し、謳うように続けた自分の言葉に、少年は戸惑った風だった。
「此の子には、欲しいものとかって無ェのかな、と思っちまったよ」
冷たい光を浮かべるだけだった少年の眼差しは、今となってはよく回らない舌の代わりとばかりに、如実に彼の感情を伝えるものになってきている。さしずめ今は、過去の自分の至らなさを指摘されてどうにも気恥ずかしくって堪らない、といったところか。
腕を伸ばし、再び学帽越しに少年の頭を撫でてやった。
「……よく成長したもンだ」
「止めてください、年寄り臭い」
感慨深く呟けば、即座に切り返された。
「言ったな、此の野郎」

確かに自分でもしまった思うほど年寄り臭い発言をしてしまった。
しかし怒りも拗ねもせず、態とらしく顔を歪ませれば、最近になって随分と感情の幅が広がった少年は珍しく声を上げて、愉快そうに笑った。

「此度の件では、世話になりました」
翌日、少年が登校したのを確認した後自らもまた電車に飛び乗り、長々と続く石段を登って鬱蒼と生い茂る木々に囲まれた、朽ち果てる寸前といった佇まいの古い社を目指した。
教えられた手順を踏み、呼び出した紫色の頭巾の女と顔を合わせて早々にかけられた労いの言葉に、顔を顰める。
「……やっぱり知ってやがったのか」
カラスの存在を知った奴が、真っ先にこちらを脅しにかかってくるだろうことなんて、彼らには端から読めていたに違いないと思い、態々こんな辺鄙なところまで足を運んで確かめに来てみれば案の定、だ。しかし問い質す隙も与えずあっさりと認められては、これ以上くどくどと言う気にはなれなかった。
舌打ちしなかったのは、せめてもの情けだ。
「申し訳ありません。何せあれは、我らの手の平から零れ落ちてしまうほどの小物でございました故。……それに貴方様であれば、我らに直接頼らずとも自らで判断し、良いようになさるだろうと信

じてもおりましたので」
「……ふん、よく言うぜ」
白々しい世辞のおまけつきでそう言ってのけたことに不快感を覚え、鼻を鳴らした。
「それにしてもお見事でした。……腕前の方は鈍っていらっしゃらないようで、流石ですね」
「そんな褒められ方されても全然嬉しくねェよ」
不快さのあまり、普段は奇麗に覆い隠している牙を僅かに覗かせた自分を見て、女は袂で口元を隠して密やかに嗤った。
此の不愉快な時間を早々に切り上げるために話を進める。
「――で、」
「元も断ちました。今後同じことが起こらぬよう、通達も済ませてあります。検死の方へも手は回しておりますので、ご安心を。――尤も、今の時勢を考えれば、これが最後になるだろうとは申し上げられませんが」
「はン、そんなの。今も昔も、そう変わりゃアしねェだろうが」
密かに案じていたことを保障されて胸を撫で下ろしながら、現役時代で既に厭というほど思い知っていることを今更だと一蹴すれば、其れに満足したのか、女は見慣れた笑みを浮かべた。
もう二度とこういった行為に手を染めるのは御免だと、そう思っていた。
だが、少年に負担をかけずに済むような案件であるようなら、自ら出張ることを厭わなくなっているのもまた事実だ。ましてや、出来得る事なら手を染めさせずに済ませたい行為を伴うとなると、ど

うしても自ら率先して動かざるを得なかった。
まんまと彼らの思惑に嵌ってしまっているようで気に食わないが、行為自体への後悔は全くといっていいほど感じていなかった。しかしそれもまた、彼らの読み通りなのだろう。
……嗚呼、畜生め。
腹立たしさに舌打ちする。
「……分かった、分かりました。つまんねェことはもう金輪際言わねェ。但し、足が出ないようにだけはしといてくれよ」
「無論です」
やけくそのように言い放った自分の要求を使者は受け入れ、話を切り上げた。
「では、私はこれで。――十四代目をよろしく頼みましたよ」
其の『よろしく』とやらも、どうせ碌な意味じゃないんだろうと罵る前に素早く姿を消され、境内に一人取り残された。
腹立ち紛れに蹴り飛ばした石ころが、かつんかつんと音を立てて転がって行った。

男が立ち去って、そう幾何かも経たない内に使者は再び其の姿を現した。
暫しの間、何かを探るように何処とも無く視線を彷徨わせていたようだったが、やがて目的のものを見つけたか。傍近くの巨木の陰に向かって静かに呼びかけた。

「……何か仰りたいことがお有りのようですね、ゴウトドウジ」
其の声 に導かれるように、黒猫は姿を現した。
かさり、かさりと乾いた音を立てて落葉を踏み締め、無言で見据えてくる翠の双眸から目を逸らさず、使者は笑みを浮かべる。
こうしている間にも『ライドウ』として任務に当たっているであろう、目付け対象の少年の元から敢えて離れ、また身を寄せている男からも完全に其の姿を隠してまで接触してきた黒猫に、何の用も無い筈なかろうと揶揄すれば、彼はその大きな目を僅かに眇め、獣の口を開いた。
「……お前、態とあの男に手を汚させたな」
静かに詰問してくる黒猫に、使者は浮かべていた笑みを更に深くした。
「何のことでしょう」
「惚けるな。……悪魔関連であるならば兎も角、一般人の始末にさえ手を焼くほど、ヤタガラスが人手不足であるとは到底思えん」
何を考えている。
歯に衣着せぬ黒猫の物言いに、使者は全く怯む様子も見せず、寧ろ口元に浮かべた笑みを深めて言い放った。
「……猫の仔と犬の仔は違います」
生来、人には慣れぬ性分のものを飼い慣らし、手の内に留める為には、其れなりの加減というものが肝要かと。

「ましてや、其れが只の猫ではないなら尚のこと。念には念を入れて己が主が誰であるのか確り教え込んでおかねば、いつ何時背を翻してしまうか分かりません。……何より、あの者は斯様な時勢にありながら、只一人で帝都に遣わすことを我らに決断せしめたほどの者でございます。勿論執着するつもりなど毛頭ございませんが、――ただ遊ばせるには、惜しい」

其れが誰を指した言葉か。察することが出来ぬほど惚けたつもりは無い。

しかし、こと彼に関する事柄に対して、属する組織の異なる自分があれこれと口を出せる道理が無い。先の発言ですら、直ぐ様退けられても文句は言えない類のものだった。葛葉とヤタガラスの関係に、累が及んでしまうような介入は、極力避けねばならない。

これ以上食い下がるわけにはいかんなと、眉間に険しさを浮かべた。

「成る程。……それに比べると、長年連れ添った『狐』の扱いなど、物の数ではなかろう」

「まぁ、御戯れを。……あまり苛めないでくださいまし」

しかし唯々諾々と退くのは性に合わない。そう思い言葉を放ったが、使者はくすりと笑いながら受け流した。僅かばかりの否定も示さないところが尚腹立たしかった。

どれ程歳月を重ねようとも、矢張りこいつらのやり方は好きになれない。

黒猫は渋面を浮かべたまま俯いた。

「……何だ、」

何やら意味ありげな視線を感じ、使者を見やれば、彼女は先程から全く変わらない笑みを口元に張り付かせて口を開いた。

「――幾年時を経たれようとも常に変わらず、随分とお優しいこと」
「――皮肉か、」
眉を寄せて鋭く問う。
「まさか。そんなご無礼を貴方様に対して働くつもりなどございません」
「ふん。……たとえ我が身を畜生に堕とされようとも、為して良いこととならんことの区別くらいはつくつもりだ」
――お前たちと違ってな。
胸中で締め括られた最後の科白を察せたか否か。
しかし使者は先程と同じく一向に堪えた様子も見せず、張り付いたような笑みを浮かべ続けていた。
こいつも充分妖しの範疇に入るな、と無言で其の姿を睨みつけていると、やがて使者は元の生気を感じさせぬ佇まいに戻り、淡々と言葉を紡いだ。
「……それではゴウトドウジ、後は宜しく頼みましたよ。くれぐれも、道を誤らぬよう」
「お前たちに釘を刺されるまでも無い。早く去ね」
背を向けてそう返せば、無礼を咎めること無く使者は一礼して姿をかき消した。
寂れた境内に暫くの間ひとり佇み、空を見詰めた黒猫は、静かに舌打ちした。

すっかりささくれ立ってしまった気を落ち着かせようと、先日晴海の外国人居留地にある書店で手

に入れたばかりの小説本を手に取った。椅子に腰深く座り込み、字体を目で追っていく。
『Vol de nuit』という表題の其の本は、此の秋に出版されたばかりの新作で、日本で扱っているのはうちだけだと店主が大仰に薦めてきたものだった。得てして新作小説につけられる宣伝文句は眉唾ものであることが多く、店主の熱意に押されて買い求めはしたものの、左程期待はしていなかった。だが、いざ頁を繰ってみると、作家自身の飛行機乗りとしての経験がふんだんに盛り込まれており、実際に現場に携わった者にしか記し得ない臨場感あふれる描写が実に素晴らしかった。
主題自体はどちらかというと苦手な類で、何だか落ち着かない気分にさせられるものの、しかし押し付けがましくなく描かれているお陰で、自分のような捻くれた人間でも左程抵抗を覚えることは無かった。仏語を自で追いながら、此れはもしかしたら将来に名を残す作品になるかもなぁと思い、薦めてくれた店主に感謝した。
かれこれ二時間ほど読み耽ったあたりで、窓枠がかたりと鳴った。
頁に栞を挟んで振り返れば、黒猫が早く開けろと言わんばかりの手つきで、外から執拗に窓枠をいじっている。木製の枠が傷んでは流石に困るので、慌てて本をデスクの上に放り出して席を立ち、歩み寄った。
「はいはい、分かったからちょっと待ってくださいよっと。……はい、お待ち遠さん。お見送りご苦労様」
がたがた、と音を立てながら窓を開ければ、黒猫は労りの言葉に答えるように一声鳴いて、窓枠から床へとひらりと降り立った。

少年が登校する際には何時も筑土の駅まで共に連れ立っているが、其の後は雨でも降らない限り気儘に過こすのが黒猫の日課らしく、午後過ぎまで帰って来ないことが多い。しかし今日は随分と早いような気がしたので左手首に巻いた時計で時刻を確かめてみれば、矢張り十一時過ぎを指している。

はてさて、天気予報では本日晴天と謳っていたように思うのだが。

本能で水の気配でも感じたのかな、と小首を傾げながら黒猫の姿を目で追っていると、何を見ているといった風体で眉を寄せられた。黒猫の不興を豪らないうちに早々と両手を掲げ、再び椅子に腰掛ければ、衝撃でぎぃと軋む音を立てながら椅子が回った。

先程の続きでも、と思うが其れもまた興が削がれてしまった。

早めの昼飯でも摂るかなぁと思いながら頬杖をついていると、暫く室内をうろついていた黒猫がひらりとデスクの上に飛び乗ってきた。

目を瞬かせ、黒猫の動きを追う。

するすると近付いてくる彼を見詰めながら、どうするつもりだろうとぼんやり考えている自分に、黒猫はなぁうと鳴きながら擦り寄った。

――驚いた。

ひっくり返るような無様な呈を晒すことだけは辛うじて回避できたが、しかし其の体勢のまま固まってしまった自分に構う事無く、黒猫はすりすりと其の身を寄せ続けた。

かつて、地下造船所で再開した折にも似たようなことをされたものだが、今回は其れに加えて今まで耳にしたことも無いような甘い声のおまけつきだ。

一体どうしてと混乱した頭を抱えてはいても、感覚というものは正直で。黒猫に優しくされて、嬉しさのあまり自分の顔が次第に緩んでいくのが分かった。

晴天の日差しを全身に浴びながら歩いてきたのだろう。彼のふかふかとした毛並みに手を差し伸べると、黒猫は自ら、近付いて来た。

間近に迫った闇色の毛皮におそるおそる顔を埋めると、太陽の匂いがした。

一方、自らの毛の内に顔を埋められた黒猫は、拒否する素振りも見せず、寧ろ其の動きに応えるかのように自分の頭部を包み込むような形で背中を丸めた。

そんな黒猫の身体を両手で緩く抱き締め、彼に甘えたまま頭の片隅で考える。

そもそもが優しい彼ではあるが、此処まで自分を甘やかすことなど滅多に無い。それなのにどうして、今日はこうまでしてくれるのだろう。

其処まで考えたところで、自分に思い当たる節などただ一つしかない。

――参ったな。

すっかり見抜かれてしまっているらしい。顔を埋めたまま苦笑すれば、にゃあと鳴かれた。

「初めてでも無いしな。……平気だよ、後悔はしていない。寧ろ、あいつが利用される羽目になるより、遥かにましだったと思ってる」

顔を埋めたまま発した所為で、くぐもった、しかし芯の通った声でそう呟けば、襯衣の襟元からほんの僅かに覗いた首筋を、痛く無い程度にざらりと舐められた。

まるで彼の子猫にでもなったような気分だった。

しかし実際に其れを口走ろうもンなら、そりゃアもう盛大に引っ掻かれるンだろうなと可笑しく思いながら、彼の長い髭が首筋や顎を掠めるくすぐったさに身を縮めた。しかし我慢しきれず、笑いながら彼の腹部から頭を上げる羽目になった。

こちらを見詰めてくる彼と視線を合わせ、次いで鼻を合わせて間近で見詰め合う。

「そういうことなんで。ひとつよろしくお願いしますよーゴウトさん」

一声鳴いて了承の意を伝えた黒猫を、そのまま深く腕の中に抱きこみ、室内の壁掛け時計を眺めた。

「あと三十分で昼飯食って。……ライドウちゃんが帰ってくるまで、まだ随分とあるなぁ」

つまんないねぇ。

自分の呟きに、黒猫がにゃあと答える。

「……天気もいいことだし。メシ食ったら、昼寝でもしようか」

にゃあ。

今日は自分を甘やかすことに決めたのか。常ならば一顧だにしないような怠惰な提案に、逆らう事無く鷹揚に返事を返す黒猫を、くすくすと笑いながら撫ぜ続けた。

「そんなに怒るなよー」

「怒ってなんていません」

少年が朝の内に用意してくれていた昼飯を平らげ、二人揃ってソファーに横たわっているうちに、

どうやら本格的に寝入ってしまったらしい。揺さぶられる振動に目を覚ました途端、視界に飛び込んできたのは帰宅したばかりなのだろう、マントを纏ったままソファーの直ぐ傍で膝立ちする少年の、ひどく不機嫌そうに歪んだ顔であった。

夕刻であるにも拘らず、少年が先ず口にしたのはおはようございます、といった朝の挨拶。其の後も何やら延々と愚痴っていたようだが、何時ものことと大して真剣に取り合わず。ごめんごめんと軽く聞き流しつつ大欠伸をしていたら、そんな無体な仕打ちに完全に拗ねてしまったのか。少年はぷいと顔を背け、何を話しかけようとも一向に返事を返してくれなくなってしまった。

やっと何か言ったと思ったらこれだ。

流石に弱り果て、どうしたものかと頭を掻く。

何時もであれば、少年が此処まで頑なな態度をとるようなことなど殆どないのだが、今回はどうやら先日の朝帰り云々が未だ少年の中で尾を引いているらしく。何時に無く強情だった。

そういえばあの日の夜も、共に過ごしたいと雰囲気で以って伝えてきた少年に構うことなく、黒猫と共に連れ立って寝室へと消えてしまっていたのを思い出した。

嗚呼参ったなぁ。ホントどうしよう。

髪を指先でいじりながら困惑する。

菓子で機嫌をとろうにも、其の手はつい此の間使ったばかりだ。

ライドウには悪いけど、出来れば今日もまたゴウトと一緒に寝たいんだよなぁ。

一週間とはかからないまでも、もう少し時間を置かねば、少年との行為に身を任せる気にはなれそ

うにも無い自身を確り自覚していたし、また其れを堪えて少年の望むとおりにしたところで、実際に肌を合わせてしまえば恐らく確実に乗り気で無いことを悟られてしまうだろうことは想像に難くない。若しそうなってしまったら、ややこしいどころの話ではなくなってしまう。

八方塞りな今の状況に、遂には頭を抱えた。

こうなりゃ両想いってのも考えもンだ。

何とか機嫌を直してくれないものかと天を仰ぐ。

一方の黒猫はといえば、目を覚ました途端、素早く自分の腕をすり抜けて行方をくらませてしまっていた。大方機嫌の直る兆しも見せない少年をもてあまし、自分に全てを押し付けたまま、何処ぞで嵐が通り過ぎるのを待っているのだろう。

先程とは真逆の心持で、薄情者、と彼を詰った。

揺り起こされる其の瞬間まで呑気に寝くたれていた男と違い、浅い眠りでしか無かった自分は、小僧が銀楼閣に足を踏み入れた時点で其の気配を察し、目を覚ましていた。

このところ妙に機嫌の悪い小僧の只でさえつまらん悪気を、ここぞとばかりにぶつけられるのは御免蒙りたかったので、何とか小僧に見付からないうちに男の腕から抜け出そうともがいたのだが、体術の心得のある男の細い腕は自分の身体をがっちりと固めており、全く勘弁してくれと焦っているうちに小僧の特徴的な物陰が廊下の硝子に映ってしまったのだ。

こうなってはもうどうしようもない。ええい、ままよと肚を決めて再び男の腕に身を任せれば、男は寝ぼけながらではあるが、自分が自らの腕から抜け出そうとしているのを悟っていたらしく、固くなっていた男の腕の筋力が途端に柔くなった。しかし改めて逃げ出そうにも最早残されし時が其れを許さず。また脱力した猫の身体を包み込むように男の腕が巻きついたかと思うと、仰向けになっていた男の身体が横倒しになり、結果先程より尚深く抱き締められた。

全く人の苦労も知らずにと、扉が開くまでのほんの一時の間、気持ち良さそうに眠る男の顔を睨みつけ、直ぐ様目を閉じた次の瞬間、がちゃりと無情な音を立てて探偵社の扉が開かれた。

幾度言葉を重ねようとも、一向に改善の兆しが見られない自分たちの行為を目にした小僧が、瞬時に顔色を変えたのが見ずとも分かった。……分かってしまった。

これは不味いことになったと真剣に危機感を抱いたので、未だ眠気に引きずられている男が我に返るより早くに退散させて戴いたという次第だ。

直ぐ其処の窓辺から微かに聞こえてくる会話に耳を澄ませ、社内の様子を窺えば、案の定、かなり揉めているようだ。助けを求める男の気配に気付かないでもなかったのだが、其処は敢えて素知らぬ振りを決めこむ。

此度の一件に関してはそれなりに便宜を図ってやるつもりではあるが、小僧との痴話喧嘩に関することまで面倒を見てやるつもりは毛頭無いし、何より、あの忌々しい草の餌食になるのは御免だった。

……全く、嫉妬深い子供の相手は面倒でかなわん。

近所の家の屋根瓦に腰を据え、大きく欠伸をした。

何も知らない小僧はいたく不満を持つのだろうが、あの男が再び小僧との同衾を了承するにはもう暫く時間がかかるだろう。
自分を撫でながら呟いた、男の姿を思い出す。
『後悔はしていない』。
自分へ向かってそう明言したものの、矢張り以前とは異なる自身の心の有様から、男はらしくもなく自身の行為に少々の後ろ暗さを感じているらしい。莫迦な奴だとは思うが、其れもまたあの小僧を大事に想ってくれているが故のことだと思うと、目付けとして無碍にも出来ない。
葛葉という組織で生まれ育った小僧は、確かに、目を覆わんばかりの世間知らずっぷりを披露する事があるが、実はそれでいて男が思っているほど小綺麗な育ち方はしていない。何があっても、また何を為しても、其の経緯を話せば聞き入れるだけのものを持っているのだが。
はぁ、と内心溜息をつく。
……小僧のそういった面に、恐らくは何処かしらで気付いてはいるのだろうが、しかし男は認めたくはないのだと、そういったところだろう。
そして其の思い入れの結果として、自ら進んで手を汚すことにしたのが今回の一件というわけだ。
全く莫迦としか言いようが無いが、しかしそんな莫迦が嫌いではないことも確かだ。
やれやれ、と大きく息を吐いた。
また小僧がごちゃごちゃやかましく絡んでくるだろうが、仕方ない。
……今晩も付き合ってやるとするか。

うとうとと再び眠気が襲ってくる脳裏で、これからの予定をぼんやりと算段する。
夕刻まであと一刻あまりか。其れまでもう一寝入りするとしよう。
小僧が落ち着くまで、其れくらいの時間はかかる筈だし。
天から降り注ぐ穏やかな太陽の光で程よく温まった瓦の上に身を丸め、辺りで囀る雀の鳴き声に交じり、開け放たれた社窓から届く男の弁解と其れに対する小僧の拗ねた声を子守唄代わりに聞きながら、黒猫は其の翠の双眸を閉じた。

『了』

・スタンする、ポス、ケーアイ、ハイジー、ブルーム・・・
海軍の隠語で順に「立つ」、「性交」、「キス」、「高級娼婦」、「浮気」を示す。

・ヘリオドール・・・
「太陽の贈り物」という名の鉱石。透き通った金色のベリル（緑柱石）。$Be_3Al_2Si_6O_{18}$。
ベリルには他にアクアマリンがある。

・錘刀・・・

伊太利、西班牙などで実際に使用された暗器。心臓を貫く。
引き抜いても肉が傷口を埋めてしまうほどに其の刃は細く鋭い。

・Vol de nuit・・・
『夜間飛行』。アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ作。
一九三二年、仏で出版され、同年のフェミナ賞（一九〇四年創設された女性だけの審査員により決定される仏の文学賞）を受賞。飛行気乗りとしての自身の経験を生かした臨場感溢れる描写により郵便飛行開拓期の歴史的資料としての価値も高い。著者の代表作としては他に『星の王子様』、『人間の土地』がある。

・A Cat in the Meal……
ひそかに準備して隠しておいた危険、隠し事のこと。